三河藻塩草

村澄山ノ社家所蔵大般若経ノ奥書

三河国真福寺於北谷不動坊散々雖為悪（筆算）依仰加書写者也、道願以書写力普及於一切我等與衆生皆共成仏

于時永和四年二月十九日　右（筆算）大夫尚辨年十八才

上州群馬郡阿内極楽寺住侶

百代後円融院永和三年丁巳ヨリ寛政六年甲寅ニ四百八年（ママ）

永和三丁巳正月廿八日良（辨）舜

願主上野居住聰俊禅尼（花押）

和漢三才図会巻六十九三河

天皇社　在ニ吉田ノ町一　社領三十石　祭神持統天皇

帝有ニ東国行幸ノ事一時、暫僑宮（きょうぐう）之跡乎六月望夜有ニ花火一

○同

浄土山大樹寺　在鴨田村　浄土寺領七百石　鎮西派小本寺当国三箇寺之内　徳川右京亮親忠卿建立（清康公曾祖父）

法名松安院殿大胤西忠　明応九年秋八月十日卒

永禄三年源元康公（東照君十九歳ノ時ノ名）、在尾州大高ノ城、潜退於当寺、五月二十二日信長以多勢急攻之、（住持）登譽上人挙旗書厭離穢土欣求浄土ノ八字、寺僧皆棄身命防之、中有祖道坊（ト云）者、大力ノ勇者也、一心（ニシレ）以為（ヘラク）、今日勝負宗門ノ盛衰極於此、開門力戦（ス）、敵時敗走陥深田同士相圧（オサレ）死者不数知、公大喜翌日入岡崎ノ城、而三州ノ士民感仏陀ノ擁護、且称（ホム）公之剛運焉、上人亦行演嘉儀、献酒肴并三十六遍ノ数珠一連、（浄土宗今所レノ用環数珠、始于此）益示

用弥陀仏力宜平治天下也、公大感得玉フ焉、

同

○当国一向宗起一揆濫觴ハ、三州ノ住人菅沼藤十郎為メニ軍用ノ構ヘレ砦ヲ、往テ上宮寺ニ奪ハフ粮米等ヲ、寺僧ノ云、佐崎・野寺・針崎之三箇寺ハ、我開山以来守護不入之霊地也、而甲乙人ノ狼藉不レ可不レ誡メ、而乱ニ入菅沼之館ニ打ニ伏下部ノ輩ヲ取ニ反ス雑物ヲ、菅沼大ニ怒リ訴フレ之ヲ酒井雅楽助正親ニ、正親遣レ使ヲ雖レ制レ之ヲ不レ鎮ラ、使者吐ニ罵言ヲ、不シテ得レ止斬レ使ヲ、因復タ訴ニ家康公ニ、公乃率ニ軍兵ヲ欲レ討ニ滅之ヲ、於レ是近在同門ノ寺僧檀越ノ輩楯ニ籠三箇寺ニ、既合戦及ニ数度、如キニ吉良義照・荒川甲斐守・松平監物・酒井将監ノ城主ノ輩戮セレ力ヲ、進マハレ足往生極楽、退レ足ヲ無間地獄ト云十二字ヲ書レ札ニ立ニ鏊ノ真向ニ、自ニ二月

十一日至翌春不暫止、互討死者多矣、公既及出馬時、如渡邉半蔵、普代近習ノ中亦宗門ノ輩俄ニ與於寺、仍有教命曰、免寺僧及徒党罪ヲ、永可賜本領也、因僉降伏、於上和田村ノ浄衆院、認誓詞ヲ呈之ヲ、謝シテ罪ヲ和解ス焉、

○佛現山隨念寺　在岡崎　浄土　寺領五十石　清康公之妹泰栄大姉ノ菩提所

○本松山高月院　在松平郷　同　寺領百石　松平太郎左衛門尉親氏建立

親氏者徳川有親之子法名芳樹院俊山徳翁

寶飫ノ郡

古事記。開化天皇條云。其美知能宇志王娶ニ丹波之河上之摩須郎女ヲ一生ムニ子比婆須比賣命ヲ一。次ニ真砥野比賣命。次ニ弟比賣命。次ニ朝廷別王。四柱　此朝廷別王者。三川之穂別之祖

本居氏、字音仮字音仮字用格云凡テ一音ノ地名ハ其韻ノ音ノ字ヲ加ヘテ、必二字ニ書ク、例、木ノ国ヲ紀伊トカクガ如シ、伊ハカ此処虫喰半ヨメズの韻也　遠江ノ郷名渭伊云云、参河ノ郡名寶飫穂カ今本飫ヲ飯ニ誤レリ義方按ニ、和名抄ニモ神名式ニモ飫ヲ飯ニ誤レリ、神名式ニハホイヒト傍点マデ誤ル、飫ヲ飯ニ誤リシ上ニテホイヒト訓モ誤リタル也、寶飫ノ郡ト云ベキ也、宝飫ノ郡ト余韻ヲ出シテモ唱ベシ、飯ハ字訓トモニ誤レリ

渥美ノ郡

和名鈔云、渥美ノ郡渥美安久美トアレバ二字トモニ字音ヲ用ルモノニテ渥美ノ郡ハ今ノ飽海ノ郷ヲ本トシテ郡名ニモヨビシナラン、イツノ間ニカ渥ヲミ訓ニ唱ヘ誤ルト見エタリ

今ノ飽海

○続日本紀云、和銅六年五月癸酉令ムニ大倭参河ヲシテ並ニ献ツラニ雲母ヲ一

○同書云、神護景雲元年八月乙酉参河国言ス慶雲見タリト、屈シテ僧六百口ヲ、於テ西宮ノ寝殿ニ設レ齋ヲ、以テナリ慶雲見タルヲ也、是ノ日緇(シ)侶ノ進退無レ復スルコトニ法門ノ之趣ニ拍テレ手ヲ歓喜スルコト一(モ)ハラ同シニ俗人ニ

天平神護三年ナリシヲ瑞雲見(アラハ)レタルニ因テ神護景雲ト改元アリシ也

○大江定基　斉光男　参河守式部太輔

○久丸大明神(和漢三才図会六十九三河)　在ニ神戸村ニ　社領三十五石　祭神未レ考　祭正月初申酉両日生土七郷人閉レ戸不ニ出入ー未レ知ニ其由来ー也、摂州西宮恵美酒亦正月十日閉レ戸謂フニ之居籠(イゴモリ)トー之類乎

林道春先生丙辰記行云、参河国、しほみ坂より二河のあいだに、纔なる溝あり、是なん遠江・三河の境なりといふ、いつそや菅野の真道ケ史を見侍りしに、持統天皇、三河国に行幸ありとしるセれと、いつれの郡郷、いつれの村里といふ事をしらす、真道は光仁・桓武の時なれは、世久敷してしらさるにや、事略して書もらせるにや、口惜、

言の葉の道は遠き神の御代よりやうやくさかへ（栄へ）て今まてもなをそしけ（繁り）りぬる、万葉よりこのかたあまたの集家〳〵の集なと、三河の国に有ける海山岡谷につけてよみたまへる古き人の歌すくなからす、それをあつめたる人もきこゆれと、残れるたくひまたおほし（多し）となん、爰に富穐（秋）のぬし、此事をのミすて（捨て）やらす、歌ひとつをひろ（拾ひ）ひてハ其所にいたり、又えて（得て）ハまたかしこにゆき、あるは人のいひつたへたるをきゝ、あるハ文をひらきて正しきハまさし（正し）きとし、あらぬハあらぬとなし、あつめ終りて三河藻塩草と名つけぬ、か

そへミるに、からうたつくはのたくひ（類ひ）まてハ三ツ（三ツ百千）もゝち
はかりにおよふ、末なかく世につたハりてミる人
玉とたとひ、きく人金のことくしたひもて遊ひすとい
ふ事いかてかあらさらんかし

元文のとしころこゝにしるす　　範舜

引書

日本紀　八雲御抄　藻塩草　伊勢物語　神名帳（延喜式）
長明道中記　山家集　紫式部家集　平家物語　十六夜日記
順和名集（鈔）　東鑑　三河双紙　国名風土記　建保百首
名所方角抄　名所小鑑　光行道中記　烏丸殿道中記　延喜式

東鑑二　三十丁　治承六
五月十九日戊子、十郎蔵人行家、在三河国、為追討平家、可令上洛之由
内議、先為祈請、相語国目代中蔵人以通、密勤告文、相副幣物等、奉
二所大神宮、
同六
加茂別当領出雲国福田庄、石見国久永保、
参河国小野庄等、成御下文、被遣社家而
同十四　十七丁　建久五
十月十七日戊戌、歯御療治ノ事、頼基朝臣注申
之、其上献良薬等、藤九郎盛長伝進之、　奉送　御幣物　美紙十帖　八丈絹貳匹　治承五年五月十九日、三河御目代大中臣以通依蔵人殿仰（ママ）所令申候也
彼朝臣者参河国羽渭庄、
為関東御恩所令領知
者、
同十六　四丁
御神領、
遠江国蒲御厨、
尾張国一楊御厨、
参河国鮑海、本神戸、新神戸、大津神戸、
伊良胡御厨惣追補使、
右件所々地頭等、依別御祈願、
所下被停止彼職候也、
鎌倉中将殿消息如比、仍
執達如件、
建久十年三月二十三日　兵庫頭
祭主殿
同十六　六丁
五月十六日丁未、丑ノ尅大地
震、今日以三河ノ国薑ノ御
厨并橋良ノ御厨ノ地頭職令下
去進大神宮給上、兵庫頭廣
元奉行之云云

名所目録

三代実録云、貞観二年八月十四日辛卯、参河国獻銅鐸一ツ、高サ二尺四寸、径一尺四寸、於渥美郡村松山中、獲之、或曰是阿育王ノ宝鐸也、

主ノ河　十首

大神宮御事、自本内心御祈令候之上旁夢想候歟、仍所思食御意趣也、告文御幣物送文等献上之以此趣可御祈念

大屋川　二首
伊良胡御厨惣追補使、
大津神戸、候也仰之旨如此謹言五月十九日　内外宮政所太夫殿　大中臣以通奉

緑野池　一首
源平盛衰記廿七巻云

豊川　六首右奉送如件

星野池　二首

矢矯川　十四首

原野沢　一首

細川　三首

引馬野　八首

大神宮祭文東国討手帰洛附天下餓死事　十郎蔵人ハ所々ノ軍ニ負テ参河国ノ国府ニ息ツギ居テ、是ヨリ伊勢大神宮へ

末腹野　四首

嶺野　二首

本野　三首

真野林　一首

祭文ヲ進ル其状ニ云云　治承五年五月十九日　正六位上源朝臣行家ノ書カリケル此祭文、神馬三匹、銀劔一振、上矢一筋相具シテ大神宮ヘ奉進ス

花の瀧　十首

出生寺　一首

法蔵寺　一首

桜井寺　一首

二見道　二首

本宮　二首

安禮乃崎　一首

伊良虞崎　十五首

童部浦　一首

志賀須香　十二首

八橋　三十七首

宮橋　一首

宮路山　十一首　宮路池　宮路野

二村山　三十（二九）首

伊駒山　三首　遠江也

雨山　二首

萩の山　一首

衣手山　二首

高師山　四首

花園山　三首

真弓山　一首

煙岩山　一首

今橋　一首

東鑑三十二　五丁
嘉禎四年二月大、頼経将軍
八日甲申、寅尅以後小雨、日出
属レ晴、未刻又雨降、着御二豊
川宿一、及二深更一風雨甚、
九日、乙酉霽矢作宿入御二于足
利左馬頭亭一、依二去夜風雨一洲ノ
俣起両河浮橋流損、
同十月、将軍下向関東、
十八日己未、霽、有二熱田社御奉
幣一、酉一点入御二ノ矢作宿辺
左馬頭義氏朝臣亭一、
十九日庚申、入レ夜雨、下戌一尅
着御二豊川駅ニ一、
廿日辛酉風雨、辰尅出御二於
本野原一、甚雨暴風然而御
輿前後人々者不レ及レ擁レ笠、
皆以舐レ鼻ヲ、午刻以後属ルレ晴、
酉尅橋本御宿、

御津　一首　佐久嶋　一首　大濱　一首　鷲塚　二首
荻原　一首　池鯉鮒　二首　岡碕　二首　衣の里　七首
藤野村　一首　竹の屋　一首　星越　二首　藤川　一首
山中　二首　関口　一首　小松原　赤坂　八（七）首　篠塚　御油　十首
御馬　二首　吉田　四（三）首　大岩　一首　二川　二（三）首

長良長彦　一（二）首

以上　五十六（七）ケ所　和歌二百二十五首

外　律詩絶句　共　十六章　名所句中に見えたり
連俳　共　四十九（五十一）句　名所書におなし

延喜式ニ曰、三河ノ州七郡也、延喜三年八月故有為八郡分宝飯於設楽此故今設楽郡大宮邑石座神社者昔宝飯郡六座之其一也

続日本紀云、文武天皇大宝二年九月癸未、遣ヲ使ヲ於伊賀・伊勢・美濃・尾張・三河五国ニ、営ニ造行宮ヲ、同年冬十月丁酉鎮ニ祭諸神ヲ、為レ将幸ニ参河国ニ也、同月甲辰太上天皇幸ニ参河国ニ、令シテレ諸国ヲ無ラ申出スコトニ今年ノ田祖ヲ、同十一月戊子車駕至レ自ニ三河ニ、免ス従レ駕騎士ノ調ヲ、

歌仙家集一　人麻呂集　東海道十五ヶ国見か波（みかは）　あた人のことにつくへき我ミかハしらはやよそにこひしてふらむ

三河

松葉集カキコミ

萬葉九　春日歌一首

三川（ミツ）ハ近江国ト云々万葉見安ニ坂本にありて定家卿歌にも　日吉歌合社頭松風ト云題ニ三ツ川とあり、拾遺愚草にあり

主ミツカハノ河フチセモヲ之淵チズサ瀬デサシ物ニコロモ不落デヌレヌ左ホス提コ刺ハ爾ナシ衣ニ手湖干児波無爾

三河国ト定メカタシ此歌去ヘシ　和名鈔　豊川　止与加波

豊川

豊川の里の旧跡、中古、田地に成て字笹板（アザナ）といふ也、昔志賀須香渡場の岸今に存セり、此所より渡舟に乗、今橋の里へ渡たるなり

豊川村の地脈にて三明寺の西南に当れり、上古の来由国名風土記に有、鴨長明海道記ニいはく、かくて本野か原を過れば懶（モノウ）かりし、蕨（ワラビ）ハ春の心を生（オヒ）かハりて秋の色疎けれ共、分行駒は鹿の毛にミゆ、時に日重山にかくれて月星「　」躔に顕れ、明暁をはやめて豊川の宿にとまりぬ、深夜に立出てミれは、此川の流広く水深くして寔にゆたかなるわたりなり、川の石瀬に落る浪の音ハ月の光りにこへたり、川辺に過る風のひゝきハ夜の色白し、又みぎハひなの栖にハ月より外に詠（ながめ）なれたるものなし

鴨　長明

海道記

しる人もなきさになミのよるのミそ馴れにし月のかけはさしくる

同

名寄

風わたる夢のうきはしとたえして袖さへふかき豊川のさと（ホイ）

富士記行　藤原雅世

かりまくらいまいくよありてとよ川やあさたつなミのすゑをいそかん

仁治の道の記　源光行イ

東関記　海道記　藤原理術

おほつかなよかはの水のかハる瀬をいかなる人のわたりそめけん

堀川院初度百首

小夜更てときあらひきぬ打音の月にさへ行豊川の里

類聚名寄　夫木廿四　衣笠殿の歌共外の書に入衣笠内大臣とあり　衣笠大納言（内大臣）

狩人のやはきにこよひやとりなはあすやわたらん豊川の水（なミ）　源頼雅イ（なミイ）

十六夜　新六帖にハたひ人とあり　阿佛

住わひて月のミやこを出（いで）しかとうき身はなれぬ有明の月　かけイ

名寄イ　新六帖ニ　矢矯　矢作矢矧　各同上　景物　川里浦橋　かはさくら　梓弓　まゆミ　うかれめ　為家

梓弓矢作のさとの樺さくらはなにのミゐるわかこゝろかな

夫木廿五　よみ人しらす

いくさミてやはきの里（浦）のあれハこそ宿をたてつゝ人ハゐるらめ

鴨長明

催馬楽一段
おやさくるつまハ
ましてるハしもし
るしあらハ矢作の
市にくつかひユかん
此矢はぎの市ハ今の
岡崎也

国名風土記云、日本武尊、
東下向之時、夷賊待高
石山、尊於此所多作矢、
日本書紀、推古天皇二十年、
自百済国、有化来物、其名寄
面身皆斑白、若有白癩、

中略　仍令レ構二須彌山一形及呉橋於南殿ニ、時人号二其人一曰二路子工一、亦名二芝耆麻呂一、云云野史曰、推古帝二十年、百済国帰化人有二白癩一、如（疑）又巧掛是橋一、令レ造二遣一諸国一、三河国矢艇ノ長橋・水内ノ曲橋・木製ノ梯・遠江国濱名ノ橋・會津闇川橋・兜岩猿橋等、其外一百八十橋ノ上、云云

此野史（先代旧事大成経）歟可考

富士紀行

思ハすや矢はきの里のうかれ妻せなにもおハぬ人なとゝめそ（と）

堯孝

長閑なる矢矧の里は日のひかり出入はての名にそ有ける

紀行

道のへのまゆミのかたへ紅葉してこゝやはきの里とみるらん

雅世

同

林道春先生、丙辰記行云、吉田、江戸より京までの間に大橋四あり、武蔵の六郷・三河の吉田・矢矯・近江の勢多なり、ひとり矢矯のミ土橋なれは洪水によりて絶る事もあり、此比新に板はしとなりけるにや、爰にしも誰か周處か三害をやめて留侯か一編を伝むや

夫木

我君のをさまれる代ハあつさ弓ひかぬ矢はきのさとに来ニけり

藤原光廣

真すくにとほれとこそハわたすらん矢作の川の橋の板をも

夕されは真野の林に風吹て矢作の里そ夏は涼しき　仲正

按矢矯橋ノ板橋と成しは慶長ノ末元和ノ初にや、右丙辰紀行ハ元和二年ノ作也

遊行上人

しるけしなかすみへたてぬ桜花やはきのさとにほふ春風

名寄　　親隆

矢矧川上野にたてるかはさくらいつかはきはにならんとすらん

身延記行　矢矯の橋をわたるとて心に思ひしまゝに　深草元政

うき世にはまたひかれしと梓弓やはきのはしにかきつけてミん

新六帖　　行家

長ゐせにこゝろしてゐよあつさ弓やはきの川の鷺の一むら

家集　矢矧川をわたるとて　細川幽斎

ときておけにかハの国のやはきかハまていと水をつくるはかりに

紀行　岡碕の城主矢作の宿まて送り出ぬ　小堀宗甫

武士（もののふ）の矢作の宿にゐるよりもなほたのミある人こゝろかな

同　かへし　田中兵部小輔吉政

武士のやはきの宿にゐる弓もおしてかへれはかひやなからむ

細川

額田郡に在、花その山よミ合、水源ハ村澄山と大澤山との中間よりなかれ出て細川村の下にて矢作川ニ流れ入

堀川百首　仲実

細川の岩間のこほりとけにけりはなその山の峯もかすめる（つゝら　なから）

氷とちなから

家集　堀川院初度百首

ちすらひのとけ行くすへに細川の岸のさわらひもえ出にけり

幽斎

細川のなかれのすゑをくミ見れはまたいにしへにかへるなみかな

和泉守　信光

細川の岩間のこけもみとりにてはなその山に春風そふく

大屋川

額田郡若松村辺に大屋河有、此川歟

八名郡に有、世俗大野川といふ、長篠村にいたり豊川と合流、此川を呼て板敷川ともいふ、金たれ、銀たれとて硯石出ル、尤名産也

武蔵野路の草に、やはきの岡さきを過て、おほひら川をわたる、此川むかしハおほや川といふとなむ、おほや川淵せとともにかハるよの名こそ流て猶久しけれ、

夫木　廿四　為相

瀬をはやミなかるゝ水ハ大屋川あやしきはしをわたるかちひと（徒歩人）

よミ人しらす

我恋は大屋かハらのいとかつら手にはとれともぬるよしもかな

緑野の池

景物　春雨　玉藻　汀

碧海郡栗寺村の地中に有、俗呼てサギサウの池といふ径半里余、東海道宇頭村より西北なり、鷺草おふるゆへ異名とする成へし

夫木　廿三　　康平四年三月祐子内親王家名所歌合　　和泉　式部

春ふかくなりゆくまゝにみとり野の池の玉藻もいろことに見ゆ

同　春雨のふり初しよりみとり野の池の汀もふかくなり行　　小侍従

星野の池

八名郡下条の地脉なり、私ニ曰、星野といふ時ハ宝飯郡行明村也、昔星野某居館の地と見えたり、星野の池ハ下条なるへし

太平記卅五二張仁木右京太夫、三河ノ星野行明等か守護ノ手ニ属セスシテ、同卅一張大島左ヱ門佐義高、当国ノ守護ヲ給テ星野行明等ト引合国ヘ入ケル路次ノ軍ニ打負テ

三河双紙　　世にてらす星野の池の三河水君かくらゐの御調とそなる

三河双紙にいはく、帝御元服の時、御鬢水に三河の国より参らする水を云と有、又ミかハ（御溝）水といふ事、大内にもありとなん

此歌可去、全ク大内御溝ノ水也

月清集　　後京極

萩の戸の花の下なるみかハ水ちとせの秋のかけそうつれる

私にいはく、此歌は三河名所にはあるへからす、禁中の歌なるへし

夫木廿六　西行
五月雨の原野の沢
に水ミちていつく
三河の沼の八橋

原野澤

碧海郡八橋近所也　八はしよミ合たり
景物　あさみとり　五月雨

家集　後京極

霜かれし原野の澤の浅みとり駒もこゝろハ春にそめけり

引馬野

宝飯郡に有、上古ハ広野成しを四方より村落多ク出来て今ハ野といはんハわつかに方十町余を存せり、来由ハ引馬誌に載之

景物　霞　姫小松　萩　鹿　朝霞　萱　雪　榛原　梓弓　思ひ草　子日

賀茂縣主考ユハ、此歌の引馬野ハ、遠江国敷智郡今の三方原とす、萬葉考別記に詳シ、

萬葉一　大宝二年壬寅冬十月、太上天皇、幸于参河時歌　長忌寸奥麻呂

引馬野爾仁保布榛原入乱衣爾保波勢多鼻能知師爾
ヒクマノニニホフハギハライリミタリコロモニホハセタビノシルシニ

千首　為家

引馬野ににほふ萩原露なからぬれてうつさんかたみはかりに

藤原清輔朝臣家集
ひくまのにかはしの
さしゝあさち原雪
の下にて猶そはて
ぬる

堀川百首　俊頼

ひくまのにかやか下なる思ひ草またふたこゝろなしとしらすや

飛鳥井栄雅千首
分ゆくも猶あかなく
に立かへりこゝろひ
くまの野への秋はき

同　金葉春　大蔵卿大江匡房

春霞たちかくせとも姫小松ひくまの野辺に我ハ来にけり

続古今　式子内親王

から衣みたれにけりな梓弓引馬の野辺の萩の朝露

二葉松には　かり衣ミたれにケりな　と有

富士紀行　雅世

旅人の乗より外のひくむまの野辺の荻萩はなやミたれん

千五百番　顕能

姫小松ひくまの野辺に子日（ねのひ）してね（根）毎にちよをかさしつる哉

御集　後水尾院

あつさゆみひくまの野辺のさをしかも夜こそさかれつまこひの声

藻塩草ニハ末原野と有

末腹野

設楽郡作手市場村地中に有、俗呼てばらふ野といふ

景物　萩　鶉　紅葉　礁（きぬた）　鹿　霰　鷹野　はゝその楓　鳥狩　日照雨　梓弓

萬葉十一　寄物陳思歌三百二首中

梓弓末のはら野にとかりする君かゆ弦のたゆむと思へ十や

梓弓、末之腹野爾、鷹田為（ツルノタエムト）、君之弓、食之（ヘヤ）、将絶跡、念（オモ）、甕屋

夫木十一　寛喜元年
五十首恋、契りおきし
末の原野の萩の露
うつろふ色にきえ
かへりつゝ　衣笠内大臣
同　喜多院入道二品
親王家五十首
鶉なく末の原野の
萩かえに秋の色あ
る夕つく日かな
禅性法師

続古今　夫木十四　行秋の末の原野のさゝのやに夜をさむからし衣うつ也　為家

ぬれつゝもしひて鳥狩の梓弓すゑのはら野ニあられふるなり

光明峯寺入道
前摂政大政大臣

新拾遺　夫木十九　とにかくにみかさとまうせ夏ふかき末腹野に日てり雨ふる　光俊

ゆく秋のすゑのはら野はうらかれて霜にのこれる有明の月

後醍醐天皇

続拾遺

長月の末の腹野のはゝ紅葉しくれもあへす色付にけり

法印　良算

堀川院初度百首
やかた尾の鷹こゑつゝも
うつらふす峯野の原に
けふも暮らしつ

嶺野

八名郡石巻山の麓、同郡嵩山村の地中、爰に竹篦山普門寺といふ古寺観音菩薩を安置す、いにしへの嶺野寺なり

上に所謂嶺野ハ豊川の渡をこへて川東也、是ハ志賀須香のわたりを今橋へ望ますして豊川の向の岸へ直に渡して今の本坂越の道也、関東へ通行に嵩山村を出て三河と遠江のさかひ本坂をこへ、三ヶ日の駅にして出合也、又志賀須香の渡し舟に乗、今橋の里につきて高師山の麓にかゝり、遠江・三ヶ日の宿へ行也、今の東海道二川・白須賀宿よりハ左の山手にかまくら道とていにしへの道條あり、三ヶ日宿の南ニ浜名橋の旧跡有、今の東海道白須賀・新居の間にいへるハいにしへの旧跡に

あらす、長明山の端の歌ハ本坂越の時よみしと見えたり、海道記にいはく、豊川を立て野くれ里くれ、はる／＼と過れハ峯野の原といふ所有、日ハ野の草の露より出て若木の枝にのほらす、雲ハ峯の松風にはれて山の色天とひとつに染たり、遠望の感心情尽かたし

海道記　鴨長明

山の端ハ露よりそこにうつもれて野すゑの草にあくるしのゝめ

名寄　同

鶉ふす嶺野の原をけさゆきていらこかさきに田鶴鳴渡る（けはイ）

本野

宝飯郡に在、此野に属する村里多し

武蔵野路草に長明ハ本野をすき、豊川に行、阿佛ハわたむつにかゝり、しかすかのわたりをこゆ

海道記

藤源光行海道記にいはく、本野か原ハ篠原の中ニ数多踏分たる道有て、行末もまよひぬへきに、故武蔵の前司（つかさの）道のほとり（たより）の輩におほせて植置れし柳もいまた蔭とたのむまてハなけれ共（かす／＼道のしるへとなれるもあはれなり　下略

（土葉松土ハかす／＼と見えたり）

藤源光行

に打出たれハ四方のうミかすかにして山なく岡なし

秦甸（しんでん）の一千里を見渡したらん心ちして草土ともに蒼茫たり、月の夜ののそミいかならんとゆかしく覚ゆ、しげれる（モトノ）

植置し主なきあとの柳原なほそのかけを人やたのまん

堀川院初度百首　梓弓本野の原の柳原春さりしよりもえそめにけり

月清集　後京極良経

移しうつる庭の小萩の露雫本野の原の秋や恋しき

新六帖三　光俊卿

住なれしもとの野はらやしのふらんうつす虫にやむしのわふるハ

真野林

碧海郡に有、矢作橋より半里ほと西南に熊野の森といふ有、いにしへの旧跡なるへし、矢作よミ合たり

夫木　仲正

夕されハまのゝはやしに風ふきてやはきの里そ夏ハ涼しき

花の瀧

宗祇名所方角鈔にいはく、花の瀧ハ八橋の里より三町東に有、と

同　廿一雑三　八橋の歌五首ある中三首めに有　慈鎮和尚

風わたるはなは三かハの八橋のくもてにかゝる瀧のしらいと

此歌こゝに八去へし

端書　建仁二年五十首、橋下花とありて八橋の歌也花の瀧の歌ならす、花の瀧といふも三河にある事覚束なし

出生寺

名所方角鈔の説を考るに、宝飯郡海辺近き所と見へたり、一説御津郷といへり、然るに近年山中法蔵寺境内に六角堂を建て、其旧跡と云事不審、後賢を待て、疑を散セん

名寄　　鎌倉　宗尊親王

頼むかけなをまよハすな有明の世を出て生るゝ寺とこそきけ

西行イ

法蔵寺

紀行狂歌　　小堀　宗甫

三河なるふたむら山をはこにして中へ入たる法蔵寺かな

額田郡に在、真言宗の古梵刹なり、則寺号を以邑の名とせり、此寺に名井有、

桜井寺

弘法大師

ちれはうかひちらねハはなのかけさしていつもたへせぬ桜井の水

まイ

上古は宝飯郡長沢村関屋といふ所に有、中古、御油宿の下に移ス、東海道下向に、左ニ入本坂越、本野か原、又ハ鳳来寺への別レ道也

大和国葛城の上郡須恵村桜井寺にも此弘法大師の歌、石に彫ておけり、いかゞいつれ前後あるべし

二見道

武蔵野路草に、いにしへハ三河の二見道とてわかれ路あれと、末はひとつになるとかや、長明ハ是よりほん野にかゝり、豊川にゆくと見えたり、阿佛ハ是よりわたうつにかゝり、志か須かのわたりをこゆと見ゆ、妹母我母、一有加母、三河有、二見自道、別不勝鶴、水河乃、二見之自道、別者、吾勢毛吾毛、独可毛将去、古今集打聴羈旅藤原兼輔　夕つく夜おほつかなきを玉くしけ云々　二見ノ浦ハ伊勢・三河にも在名也と打聴に書しハ此二見（出カ書カ）　万葉三　高市連黒人羈旅歌八首中の道ト云よりいはれしなる

べし、然ども二見道といふにて三河に二見の浦の名はなし

妹も我もひとつなるかも三かハなるふたみのみちハわかれかねつゝ（ゆ）（る）ぬる

同一本云

三かハなる二見の道より（の）（ゆ）わかれなはわこせも我もひとりかもねん（る）（れ）（ママ）（ゆか）

本宮

宝飯郡上の長山村の地中也、山上に砥鹿宮といへる神社有、南、海を望ミ、甚佳景也、社職ハ同郡一ノ宮神主草鹿砥氏某兼帯焉

菅沼織部介入道にあふて挨拶してわかれ、本宮の雪を見てよめる　宗牧

詠　めつゝわかれんかたもなかりけり汀の氷ミねのしらゆき（かへし）

楠　千代

立　わかれゆくらんかたのミねの雪　みきわの氷　おもひこそやれ

安禮乃碕

宝飯（渥美）郡に在、いにしへ東西に入江ありて其中央の出崎なれとも、中古、大風津浪の為、左右の江を埋て今崎といはん方なし

万葉一　大寶二年壬寅（フタトシノ）冬十月（カミナツキ）太上天皇（オホスメラミコト）幸二于三河国一時ノ歌　高市連黒人

何處爾可舟泊為良武安禮乃崎榜多味行之棚無小舟（イヅコニカフ子ハテスラムアレノサキコギタミユキシタナナシヲブ子）

伊良虞崎　景物　蜊　崎浪ノ小松　空蝉　忘貝　月　鶚（ミサゴ）　渡り　蛍　霧
はる地の濱　釣舟しほさゐ　かつをつり舟　子規　千鳥
蜑（あま）小舟

嶋　玉藻　岩根松　礒馴松　神馬藻（ナノリソ）　嶋地　鴎

続後拾遺　　匡房

海士のかるいらこかさきのなのりそのなのりもはてぬほとゝきす哉

堀川百首　　よミ人しらす

玉藻（浪のよるイ）かる伊良こか碕（しまをわたる舟イ）の蜑小舟はやこきわたせしまきもそする

万葉一　夫木　しほさゐにいらこか嶋へこく舟にいものるらんもいもゝのるらん――とあるふみに見えたり　　柿本人麿

しほさゐにいらこの嶋へ漕舟にいものるらんもあらきいはまツを（か）（し）

持統天皇也
幸（アリ）伊勢国、之時、留（ミヤコニ）
京柿本ノ朝臣人麻呂が作歌、
潮左為ニ、五十良児　　風雅
乃嶋辺、榜船荷、
妹乗良六鹿、荒島回乎、

入道三品親王大道覚助

風わたる伊良虞か嶋（崎）の礒馴松下枝（シツエ）はなミのはなさきニけり

大神宮千首　夫木廿六　岩に生ふる伊良児か崎の松よりもつれなき人はねかたかりけり　清輔朝臣　　後水尾院

なひくやと人のなのりそかりてミんいらこかさきのあまならぬ身も

夫木廿六　我恋はいらこか崎の海人なれややく塩かまのけふりたえねは　参西法師　よみ人しらす

風さむミいらこかしまに鳴千鳥なミのたちゐに声さわくなり

千載　修理大夫顕季

玉藻刈いらこか嶋（崎）の岩根松いくよまてにか年をへぬらん

夫木廿七　正治二年百首　あさりする伊良胡か崎の海士の子はうかふかもめをともと見らむ　季経卿

伊良虞嶋（崎）にかつをつりふねならひうきはかけの浪にうかれてふ見る（てはかち）（ひ）（そよる）　西行法師

頓阿百首　波のよるいらこか崎をわたるふねはや漕わたせしまきもそする　国信

夫木廿三　白波のいらこかしまの忘貝人わするともわれ忘れめや　基俊

（はかちの濱に流てぞよる　伊セ参宮名所図二三）

呉竹集　夫木廿三　為家卿家百首　嶋ひゝく五十良虞か崎の潮さゐにわたる千鳥の声かすか也　従二位家隆

ひきすてよいらこの鷹の山かへりまた日ハたかしこゝろそらなり　家隆

夫木廿六

続後撰　波もなし伊良胡か崎に漕出てわれからつけるわかめかれあま　西行　藤原家経（道）

玉もかるいらこのあまも我ことやかわく間なくて袖ハぬるらん

山家集　沖の方より風のあらきとてかつを（魚）と申いをつりけるふねとものかへりけるをみて

隆祐朝臣　嶋ひゝくいらこか崎の波間にもこたへぬ玉ハ蛍なりけり

雪玉　同　五十良児崎にかつをつり船ならひうきてはかけの波にうかひてそよる　西行

たまもかるいらこか嶋の秋の月なれぬるあまも袖ハほさしを　実隆

信太社　同　みさこゐるいらこか崎のそなれ松いく世の波にしをれきぬらむ　作者不知

玉藻刈伊良胡ケ嶋（イ崎）のなのりそのなさへかひなしなミの下草

三河国名所歌合

同　なくさめにひろへは袖そぬれまさる伊良児か崎の恋忘貝　為忠朝臣

ふたつ有ける鷹のいらこわたりすると申けるか、ひとつの鷹ハとゝまりて梢（木のすゑ）にかゝりてまつ（待）と申けるを聞て

山家集　西行法師

巣鷹わたりいらこケ嶋（る崎）をうたかひてなほきにかへる山かへりかな

はしたかのすゝろかさてもふるさせてすへたる人のありかたのよや

萬葉集一ニ　麻続王（ヲミノオホキミ）流サレシニ於伊勢國伊良虞嶋ニ時、時ノ人哀傷（カナシミテ）作ル歌

打麻乎麻続王白水郎有哉射等籠荷四間乃玉藻苅麻須

（ウチソヲヲミノオホキミアマナルヤイラコガシマノタマモカリマス）

麻続王聞（コレヲキヽテ）之感傷（カナシミテ）和歌（コタヘ玉フ）

人麻呂潮左為二の歌
の下

賀茂縣主萬葉考に
いはく、いらこハ参河国の崎也、
其の崎いと長くさし出て、志摩の
たぶしの崎と遙に向へり、其
間の海門（ウナト）に、神島（カミ）、大づくミ、小
づくミなどいふ嶋どもあり、
それらうけて右へハいらごの
嶋といひしか、されど此嶋門（ト）
あたりハ、世に畏き波の立ま
ゝに、常の船人すら、潮に渡
る所なれハ、官女などの、船遊
びする所ならず、こゝハ京にて、
大よそを聞て、おしハかりに
よミしのミ也、
赤染右エ門

大江為基、三河のかミになりて
くたりしに、あふきしてやり
しに、すはまにかきつけし、
おしむへきミかはと思へと志か
すかのわたりときけはたゝ
ならぬかな
くたるへきほともちかう
なりぬるを、いかてたいめん
せむといふ乎、さもあらねハ
くたるとて、
人しれす袖はぬれつゝわかるとも
たえしとそおもふ八はしの水

返し
八はしのくもての水のわかれ
なはとひわたりつることや

またれ翁
後拾遺　能因法師
志かすかのわたり
にてよミ侍ける
おもふ人有となけれと
古里ハ志かすかにこそ
立しかりけれ

家集名寄

空蟬之命乎惜美浪爾所湿伊良虞能島之玉藻苅食（ウツセミノイノチヲヲシミナミニヌレイラコノシマノタマモカリヲス）

萬葉右ノ歌ノ註

日本紀曰、天皇（天武）四年（乙亥）夏四月（戊戌）朔（乙卯）三品（位日本紀）麻続王有罪流因幡一子流伊豆島二子流血鹿島也　日本紀ニハ四年夏甲戌朔辛卯三位麻続王有罪流于因幡一子流伊豆島一子流血鹿嶋ト見エタリ、未知是非姑記之以俟他日之考而已

按ルニ、伊勢の国、伊良虞嶋に配せらるゝといふハ、歌辞によりて後人あやまり記するか、因州に配せられて後伊良虞嶋に移さるゝか、古記に伊良虞を伊勢の国とも有、又ハ志摩の国に有とも見へたり、今ハ知行の為に三河の国に属す、如斯類例多し、根羽根ハ三河国なれ共今信州に属シ、南北四里信濃国に入、吉崎と云邑一村、加賀越前両国に分ル、并越前と若狭ニも有、むかしハ知行の為越前ニ入、今ハ若狭ニも入も有

童部浦（どふほ）

渥美郡向津江口に入て老津嶋に近しといふ
老津嶋よみ合

家集にいはく、三河国老津嶋といふ洲崎に向ひて童部の浦といふ入海のおかし（を）
きを口すさひてによめり

紫式部

老津嶋しまもる神やいさむらんなミもさわらすわらハへのうら

藻塩草

志賀須香

宝飯郡豊川村の地中也、上にいふ、豊川の下に祥詳カなり、宮路山よみ合　清少納言枕草子にわたりは志かすかの渡り云々

建保百首ニハ志香須賀と有、　景物　わたし守　わたし舟　たひ人　玉藻

遠きわたり

続拾遺　二葉松ニハ　二品法親王菟道と有り、集も続後拾遺とあり　二品親王　慈圓

あふ瀬こそ間遠なりとも志賀すかのわたりなれにし中なわすれそ

建保百首　知家

あひミてもあハてもなるく志か須かの渡りものうき夢のうきはし

屏風の絵に志か須かのわたりゆく人立わつらふか　と書きたる（る所）をよめる

金葉　藤原家経

行人も立そわつらふ志賀須香のわたりやたひのとまりなるらん

拾遺金葉　大江の為基あつまへまかりくたりけるにあふきつかハすとて　赤染右衛門

をしめとてもイなきものゆゑに志か須かのわたりときけはたゝならぬ哉

万葉七　寄藻　超　浪　者　恐　然　為　蟹　之　藻之　憎　者　不有手

荒磯こすなミハおそろし志かすかに海の玉藻のにくゝハあらすて

源順集　永観元年、一条藤大納言、寝殿障子にくに／／の名あるところ／／をゑにかける〇〇〇かく歌しかすかのわたり

行かよふ舟路ハあれと志か須かのわたりハあともなくそ有ける

堀川院初度百首中／／に水かさまさりて志かすかのわたりもたえし五月雨の頃

千首和歌寄　花園三位公晴

みやこ出ていくかゝたひを志か須香の遠き渡りに今そ成ける

新勅撰　建保名所和歌三百首　かくしつゝくれぬる秋を志か須のわたりも浅き契とそ思ふ　順徳院　中務

ゆけはありゆかねはくるし志かすかの渡りに来てそおもひたゆとふ

名所和歌三百首　これもまたまれなる中ハ志か須かのわたりさへこそうつろひにけれ　家隆　よみ人しらす

いへはありいはねハくるし我心こや志かすかの渡り成らん

夫木廿六　永観元年、一条大相國家障子絵歌　源順

夫木廿六　能宣朝臣
いつ方によりてわたらん
志かすかの手向の神に
まつやつけまし

同　作者不知
うれしきハけふ志かすかの
わたりにて都いてたる
ひとにあひぬる

同　同
あい見つゝ猶おぼつかな
宮路山こや志かすかの
渡なるらん

同　祐子内親王家歌合

此万葉ノ歌ハ言辞ニテ地名にアラズ

わたしふねゆたのたゆたに
志かすかは旅人わたす渡り
なりけり

同
志かすかの遠きわたりに
おなしくハなと八橋を
わたさゝりけん

同　為忠朝臣家三河国
名所歌合
おもひ出てあまつをとめの
恋しきハ猶志しかすか
の渡也けり

屏風に志しか須の渡り
に雪ふる旅人舟に
のりて渡所
能宣朝臣

夫木廿一
雪により帰りやせまし
志かすかの古道とひ
ていさ渡りなん

能宣家集
志か須かの渡り
雪ふり侍るふね
にのりてまかる
雪によりかへりや
せまし志かすかに
故郷恋しいさわたり
なん

志賀須香の渡にてわたし守いミしうぬれ侍る

名所和歌三百首
これもまたまれなる中ハ志か須かのわたりさへこそうつろひにけれ　家隆

旅人のとしも見えねと志か須かのみなれてこゆるわたし守かな

釋益基

名所和歌三百首

名所和歌三百首　かくしつゝくれぬる秋を志か須かのわたりも浅き契とそおもふ　順徳院

秋風になく音をたてる志かすかのわたりしなミにおとる袖かは

定家

兼盛家集
わきも子か家ちふミわけ志かすかのわたりかたくもおもほゆるかな

夫木廿六　建保三年名所百首

うしとてもなほ志かすかのわたし守しるへなミの行ゑをしへよ

僧正行意

志賀須香の遠きわたりにおなしくハなと八はしをわたさゝるらん

寄渡恋　いかにセん思ひたえんも志か須かのわたりそめたる中のうき瀬を　本居宣長

所謂志賀須香に雑説あり、矢作より半里西南に渡り村と云有、古

渡成へし、又の説、矢作一里半上に大門村といふ有、古渡成るへしと是ハ鹿の渡りといへり、三河記の説をとるとみへたり、両所共々難信用、景物をミるへし、宮路山を程近くよミ合たり

八橋

碧海郡に在、原野沢よミ合　景物　沼　桜花　玉柳　五月雨　郭公　旅人　旅　杜若　蜘手　擣衣（摂カ）　雪　みとりのいと

名所方角にいはく、花の瀧より八橋の宿ハ三町はかり西なり、北より南へなかるゝ小川なり、橋も一丈はかり也、四角なる木のちいさきを八ツわたしたり

伊勢物語にいはく、むかし男ありけり、その男身をやうなきものにおもひなして、京（花洛）にハあらし、あつまのかたにすむへきところ（所）もとめんとて行けり、もとより縁友（トモ）とする人ひとりふたりして往けり、道しれる人ひとりもなくてまとひいきけり、三かはの国八橋といふ所にいたりぬ、その所こを八橋といひけるハ、水ゆく（せ）かはのくもてなれは、橋を八ツわたせるによりてなん八はしといひける、その沢のほとりの木のかけにおりゐてかれいひくひけり、その沢にかきつはたのいとおもしろく咲けり

それを見てある人のいはく、かきつはたと云五もしを句の上に（首）
すへてたひの心をよめといひけれは　よめる

伊勢物語　古今　　在原業平朝臣

唐衣着つゝなれにしつましあれははる〳〵きぬる旅をしそ思ふ

夫木　廿一　　中務卿

八橋のあたりの里の秋風にきつゝ馴にしころもうつなり

千五百番歌合　　越前

五月雨にかけそのこれる（のミ残る）心地してそこに見ゆるやぬまの八はし

海道記にかの草とおほしきものハなくて稲のミそおほく見ゆれは　　親行

海道記　　藤光行

花ゆへにおちしなミたのかたミとや稲葉の露を残し置らん

聞わたるくもてゆかしき八はしをけふハミかハすたひ二来二けり　　堯孝

○行くて三河の国八橋のわたりを見れハ、在原業平、かきつはたの歌よミたりけるに、ミな人かれいひのうへになミたおとしける所よと思ひ出られて、其あたりを見れとも、

藤川百首　　定家卿

年月も移りにけりな柳かけ水ゆくかはのすゑのよの春　松イ

拾玉

二　旅人をたエす三河の八橋のくもてへたつる杜若かな　慈鎮和尚

夫木　六　文治三年百首

関路こえ都恋しき八はしにいとゝ隔つる杜若かな　定家

同　百首歌　杜若

杜若匂ふ河辺の旅衣この下かけもたちそやられぬ　家隆

八橋のくもてにわたるひまもなし君のためにといそく旅人　雅世

夫木　三　俊成卿

八はしにみとりのいとをくりかけてくも手にまかふ玉柳かな

（のイ）　（わたるイ）

祇園社百首歌

玉葉　十木夜日記ィ　夫木六　天応元年七社百首

八橋の昔のあとの杜若同し心に恋わたるかな　為家

さゝかにのくもてあやうき八はしを夕暮かけてわたりかねぬる　安嘉門院四条

千首歌

後撰　八橋の汀に咲る燕子花昔の色を恋わたるかな　同

打わたしなかきこゝろは八はしのくもてに思ふことハたへせし　よミ人しらす

堀川百首　　肥後

さゝかにのくもてにミゆる八はしをいかなる人かわたれそめけん

鴨長明海道記にいはく、かくて三河の国にいたりぬ、雉鯉鮒（ママ）が馬場を過て数里の野原を行く、一両のはしを名つけて八橋といふ砂に睡る鴛鴦ハ爰（夏）を辞したり、水にたてる杜若ハ時を迎へて開たり、花ハむかしの色かハらすさきぬらん、橋もおなしはしなれとも幾度つくりかへつらん、相如か世をうらみしハ、肥馬にのりて昇僊にかへり、迷（幽）子身を捨る、窮鳥に類て当橋をわたる、八橋よ〳〵くもてに物おもふ人ハむかしも過きや、橋柱よ〳〵おのれも朽ぬるか、むなしくくちぬるものは今も又すぐ

海道記　　鴨長明

住わひて過る三かはの八橋をこゝろゆきてもたちかへらはや

拾遺　源よしたねか三河の介にて侍りけるむすめのもとに母のよミてつかハしける（義種）　　源義雅

もろともに行ぬ三かわの八はしを恋しとのミや思ひわたらん

御集鴨三十首中雑

から衣きつゝなれにし詠ふりてけにそミかはの沼の八はし　　後鳥羽院

藤原清輔朝臣家集

けさうしけれと心がたかりけるをんなにつれなしとかつはみかわの八橋を猶こりすまに恋わたるかな

源三位頼政家集
紀伊守、三河守にふちされたるめの其ことを心にかけたる気色なるを白川なる人のつかはしける
八橋と吹上の濱に忘すは思ひも出よ白川の里
かへし
八橋ハふミ絶にしを今更に何かくもてに思ひ乱れん

千載　あつまのかたにまかりけるに八橋にてよめる　道因法師

八はしのわたりにけふもとまるかなこゝにすむへきミかはとおもへは

続古今　よみ人しらす

恋せんとなれるミかはの八はしのくもてにものをおもふころかな

新続古今（新拾遺）　為家

唐衣はる〳〵きぬる八はしのむかしのあとに袖もぬれつゝ

同　堀川院中宮上総

八はしをゆく人ことにとひミはやくもてにたれを恋わたるそと

夫木八　俊頼

時鳥まちしわたらは八はしの蜘手のかすに聲をきかまし

中院通茂

八はしの春をやのこすかきつはた世をへたてゝも恋わたるかな

と ィ　実業ナリ　元禄五年夏四月懐古村積村名例　〲原字ノマヽ、定カニ判ズル不能

こひミてもあはれあとなき八橋にかけてそしのふ遠き昔を　清水谷実成

歌枕

春くれは八はしかハをくもてにて苗代水に人やひくらむ（のせ）　作者不知

かつらきの神ハわたさぬ八橋もたへてかすなき蜘手成けり　雅康

歌枕

かきつはたすれるころもの露かけてはる〳〵きぬるはるの八はし　実相

堀川院初度百首

八橋の蜘手に水をまかせつゝ苗代小田にまかぬ田そなき（ひ）

かきりあれは思ひわたりし八橋を七十ちかきよはひとそ見る　雅康

同

かきつはたミなからたへてむらさきの一もとのこるはなたにもなし

室カ　宝カ

平家物語にいはく、下野の国、宝の八嶋へさすらへたまふて

此国にてよめり、このうたゆえに召かへされたまふと

平家物語　源中納言師仲

夢にたにかくて三かはの八橋をわたるへしとハおもはさりしを

紀行狂歌　小堀宗甫

八はしにはる／／ときて三かはなるはなにハことをかきつはた哉

道中記　烏丸光廣

三河なるその八はしを来てミれは田はかりありてかきつはハなし

春曙

春の比八橋を見むといひてけれとさハる事ありてまからて

いまた日たかなれは、八はし御覧しにおハすへきとおほせと、程を

へたてたれは、人馬の労思召てやミぬ

同

よそなから雲のはたてにかけて思ふその八はしの春の夕くれ

夫木　廿　　為忠朝臣家三河国名所歌合

あふちかハこえにしかとも八橋を猶よとゝもに恋わたるかな

ミな人ハ夢の世わたる八はしのくもてになにをおもひわたらむ　　同（ふ）

同　三河なるこひちにわたす八橋はひとりふしするまろきなり鳧　　意尊法師

いにしへをしのふあはれや旅衣そてもしほれてわたる八はし　　遊行上人一法

同　八橋のあたりの里の秋風にきつゝなれにし衣うつなり　　中務卿

八橋にいつか来にけむ行水のくもてにさけるかきつはたかな　　烏丸光廣

建仁二年五十首橋下花

同　風わたる花乎三河の八橋の蜘手にかゝる瀧の白糸　　慈鎮和尚

夫木　廿一　海道宿次百首

ふりにける名をのミかけて八はしのあとは水行く川たにもなし

夫木　廿六

五月雨は原野の沢に水こゑ（え）ていつれ（く）三かはのぬまの八はし　　西行法師

夫木　十八　百首御歌冬十五首の中

駒とめてしはしハゆかし八橋のくもてにしろきけさの淡雪　　順徳院

元政法師身延紀行

八橋ハゆかしけれどさだかにをしふる人なし、このもかのものいつこならんと見渡す、菅原の孝標（タカスエ）の女の記に

八橋ハ名のミして橋のかたもなく、なにの見ところもなし、とかける今にまいて跡をだにしる人なかるべし　　規行　光廣

八はしや思ひわたりしふしのねを雲のはつかにけふミつるかな　谷宗牧イ

同

道中記狂歌

名にしおふ三河の澤に来てミれはかきつはなくて田ハかりそある

松平太郎左衛門尉親氏卿の内室ハ在原信重の息女にて

おハしませは、むかしをおもひ出て

親氏卿妻女

思日きや名のミくちせぬ八はしの浅沢水に袖ぬれんとは

萬吟集

八橋のそのはしづくる
君なれやかなたこな　三河八代記
たにおもひかくらむ
沙門契沖

宮橋

宝飯郡御津ノ神祠の前に架したるといふハ非なり

同郡八幡村八幡宮の下にすこしき板橋有、俗呼て筋違橋といふ、是也といへり

海道記にいはく、此橋の上におもふ事をちかひてうちわたらは、何となく心もゆくやうにおほへて、遙に過れは宮はしと言所あり数双のわたし板ハ朽て跡なし、八本の柱ハのこりて溝にあり、心のうちにむかしをたつねて言のはしに今をしるす

○貫川（ぬき）　三河にも有へし

催馬楽のぬき川のうた

ぬき川の、せゝのやハらたまくら、
やハらかに、ぬる夜ハなくて、おや
さくるつま

二段

おやさくる、つまハまして、子ハしも
しかしあらハ、やはきのいちに、く
つかひにかん、

三段

くつかハゝ、千かいのほそしきを
かへ、さしはきて、うはもとりきて、
ミやちかよはん

海道記　名寄イ

宮橋ののこるはしらにことととハんくちていく世かたえわたるらん　鴨長明りぬる

宮路池

六帖三、夫木廿三、作者不知

水鳥のうきて心はまとふかな
宮路の池に年ハへぬれと

宮路野

夫木廿二民部卿為家

内日さす宮路の野への
朝霞つかへし道を
なとやたつらむ

催馬楽三段

くつかハ、千かいのほそ
しきをかへさしはきて
うはもとりきて宮
路かよハむ

宮路山

和妙鈔宝飯郡宮道美也知　三才図会六十九　宮路山在赤坂不山高

宝飯郡赤坂宿の上南ノ方ニ在、

景物　藤　紅葉　手向
雨　池　水鳥

志賀須香よミ合

後撰　恋五

君かあたり雲ゐにミつゝ宮路山うちこえゆかん道もしらなくに　よみ人しらす

あつまよりのほりけるとて（と て）未三河の国宮路山を十月晦日（カンナツキ）に過るに紅葉また盛ニ見えけれハ　と二葉松ニ有り

あつまよりのほりける時、十月廿日過るに紅葉のさかりにミえけれは

とて三河国宮路山を十月晦日に過るに

玉葉

嵐こそふきこさりけれミやち山また紅葉々のちらてのこれる　菅藤原高標女孝イ也

夫木　廿　あひ見つゝ猶おほつかな宮路やまこや志賀須かのわたりなるらむ　作者不知

家集

△名にしおはゝ遠からすとも宮路山こへん手向のぬさにせよ君　躬恒よみ人しらす

宮路山のすそ野に竹の林有て、萱家のミゆる、いかにして何の便にかくて住らんと

▽左馬のかミの家にて、三河のかミの馬のはなむけセしによめる、

十六夜日記　　阿佛

ぬしやたれ山のすそのに宿しめてわたりさひしき竹の一むら

紀行（夫木六）　いほぬしといふ書に在イ　　増基法師

紫の雲とみゆるハミやち山名高き藤のさかりなりけり（る）

名高き藤の咲ける成けり　と二葉松に有り

六帖　　為家イ

水鳥のうきてこゝろのまとふかなミやちの池に年ハへぬれと　　よミ人しらす

十六夜日記　　阿佛尼

此の山まてはむかし見し心ちする東（と）ころさへかはらねは

待けりなむかしもこへし宮路山おなししくれのめくりあふよを

同

廿一日、八はしを出て行くに、いとよくはれたり、山もととほき原野を分ゆく、ひるつかたになりて、紅葉いとおほき山にむかひて行、風につれなき所々、くち葉にそめかへてけり、ときは木も立ましり、あをちの錦を見る心ちしす、人にとへは、宮路山といふ、

宮路山分行袖はもみち葉の色にはえあるあきの旅人　　籠日方塾

同

しくれけり染るちしほのはてハまた紅葉のにしき色かハるまて

慢葉此等ノ宮道ハ宮道山ヲ指ニアラズ、但大宮ヘ通フ道也

萬葉

ウチヒサスミヤチヲユキニワカモヤレヌタマノヲノオモヒステ、モイエニアラマシヲ

撃日刺宮路行丹吾裳破玉緒念委家在矣あ

同十一

ウチヒサスミヤチノヒトハミチユケトワカオモフキミハタ、ヒトリノミ

打日刺宮道人雖満行吾念公正一人

人磨

吐懐篇下云、和名抄云、三河国宝飯ノ郡宮道（知美也）催馬楽にやはぎの市に沓かひにいかん

なといひてはてに宮路通はん　といへるもこれなり

蒿蹊歌書ニ云、和名抄宝飯二字穂と訓ず、八雲御抄に尾張と出たるゆゑに本集のごとくミ河なるよし証せらるゝなり

此三首宜去

旋頭歌

同十一

ウチヒサスミヤチニアヒシヒトツマユヘニタマノヲノヲモヒミタレテヌルヨシソオホキ

内日左須宮路爾相之人妻始玉緒之念乱而宿夜四曽多寸

更級日記に、八はしハ名ノミして、なにの見ところもなし、二村の山のなかにとまりたる夜、大きなるかきの木のもとに、いほりをつくりたれハ、夜ひとよ、いほのうへに、かきのおちかゝりたるを人々ひろひなとすと、云云

二村山

加茂郡に在

衣の里よミ合

郭公　樵射　促織　紅葉　柞　錦

里　麓の萩　はこ鳥　いはつゝし

八雲御鈔・藻塩草等の説にハ二村山ハ衣の里より北西にあたるよし、名所方角抄には衣の里は二村山より二里ほと南也とあり、私に云、西の宮東の宮とて山上に二村の林あり、下の宮有、すへて猿投三所明神の御敷地なり

伝にいはく、二村山ハ加茂郡猿投山也と、又額田郡山中法蔵寺の山号に便りて中古こゝを二村山とよミし歌有、他の国にも例ありおなし国にても郡異にして同し名所あり、法蔵寺山を二村山とよみしもしかるへきか、然れ共加茂郡二村山をよみし古歌尤多し、此集にハ二所の歌を混す、見む人心を付へし

上に所謂国おなしくして郡異なるに同名所の例証ハ山城国大原山、又大原の里とよみたる歌所々に有、西山・北山・愛宕郡・乙訓郡おの〳〵大原をよミたる古歌多し、和歌の浦友千鳥集に粗載之

海道記にいはく、潮見坂といふ所をのほれは呉山の長坂にあらすといへとも、周行（元文）の短息（元文）はこゝにあへたり、数歩を通してなかき道にすゝめハ、宮路・二村の山中を賒に過て山ハいつれも山なれ共優興ハ此山にひく、松ハいつれも松なれ共木立は此松に止れり翠を含む風の音に雨きくといへとも、雲に舞鶴の声に晴の空をしる、松の性々々汝ハ先年の貞あれはおもかハりせし、再往々々我は一時の命なれは後見期しかたし

海道記　　鴨長明

けふ過ぬかつらハまたよ二村のやまぬなこりのまつの下道

夫木　十一　大嘗會主基方御屏風丹後とあり　　大江匡房

此歌可去　二村の山のふもとの秋萩はにしきをしける野辺かとそミる

武蔵国よりのほり侍りけるに三河の国二村山の紅葉をミてよめる

金葉　詩花　秋　　橘能元

幾重とも見えぬ紅葉のにしきかなたれ二村の山といひけん

堀川院の御時、きさいの宮にて閏五月郭公といへるこゝろをよめる（よミ侍ける）　　権中納言俊忠

五月やミふたむら山のほとゝきすミねつゝきなく聲をきくかな

千載　　俊惠

くれはとりふたむら山に来てミれはめもあやにこそ月ハすミけれ

契沖師吐懐篇云
二村山　三河
和名抄云、尾張国山田郡
両村（布多）（無良）　これにかよれハ
三河にハあらぬにや、
但、詩花集にハたし
かに三河とあり
真淵冠辞考云
二村山ハ和名鈔に
尾張国山田郡両村
（布多）（無良）とあり、詩花集
にハ参河国の二村山
かけり、もしハ国の境
などにありて、かなた
こなたにわたる故にや、
くにぐに問べし

名寄

前内大臣基

雪となり雨となりてやミねわけよかゝれる雲の二むらの山

あけくれていくよなるらん玉匣（タマクシケ）ミやこに遠きふたむらのやま　為氏

山家集　上　久月を待といふことを　西行

出なから雲にかくるゝ月かけをかさねてまつや二村のやま

遠江記　増基

唐国のものなりとてもくらへミん二村山のにしきにハ似し

海道東関記　やかてよのうちに二村山にかゝりて　略　源光親行

玉くしけふたむら山のほの〳〵とあけゆくすゑの浪路成けん

同　雅康

をそくとくうへおく苗も二村の山の名うつす小田の面かな

名寄　夫木　廿六　衣笠大納言

東路の山にや春の残るらんふた村ミゆるおそさくらかな

続古今　平泰時

ちかつけハ野ちのさゝはらあらハれてまたすゑかすむニ村の山

篠

後

続撰恋　清原諸實

△おほやけのつかひにて、東のかたへまかりけるほどに、はじめてあひしりて侍る女に、かくやむごとなき道なれバ、心にもあらすまかりぬるなど申てくたり侍りけるを、のちにあらためさためらるゝことありて、めしかへされけれハ、此女きゝて、よろこひなから、とひにつかハしたりけれハ、道にて人の心ざしおくり侍りける、くれはとりといふきぬを、ふたむらつゝミてつかハしける、

▽くれはとりあやに恋しくありしかハニ村山もこへすなりにき

同

此二首後撰に出たりといふ説あり

返し

よみ人しらす

唐衣たつをおしみしこゝろこそニむら山のせきとなりけめる

続古今　順徳院

ともししてこよひもあけぬ玉くしけニ村山のミねの横雲

続後撰　中宮上総

時鳥ふたむらやまやこえつらんあけはてゝのミ声のきこゆる

新千載　藤原行朝

こえゆけは一かたならすかすむなりふたむら山の春のあけほの

夫木　　冷泉大納言

誰代よりうへてこの名をとゝめけむそのふの竹の二村の里

同六　堀川御時后宮歌合　　甞根俊忠

霞たつふたむら山のいはつゝし誰（たが）おりそめしからにしきかも（そ）

同廿　弘安二年筥根山奉納百首　　西行

わすれすよあやめもミえす行くらし二村やまの末の野ハらは　　安嘉門院四条

三河なるふたむら山をわかれてハ此世も我もあらしとそおもふ

夫木廿

ほとちかく衣の里ハなりぬらんふたむら山をこえてきつれは　　経衡

△二村山をこえてゆくに、山も野もいととほくて、日もくれはてぬ、

十六夜日記　　阿佛

▽はる〳〵と二村山を過（衍字）行過てなほすゑたとる野辺の夕やミ

夫木廿　郭公帰山　　俊頼朝臣

ほとゝきすふたむら山をたつねミん入（イル）夜（あや）の声やけふハ（や）まさると

続古今　　右大将頼朝

余所に見しをさゝかうへの白露をたもとにかくるニむらの山

夫木　夫木八　郭公ともしからすといふ事を

いまこそは二むらやまのほとゝきすこゑをりはへてあやになくなれ　俊頼

しつかなる二村山の麓にそちとせの松のはなそ咲ける　正家

同　十四　ミちの国へくたりけり(る)に二村山にて　重之

秋風にはたおる虫のこゑきゝてたつねそこゆる(しけミ　こえつる)二むらの山

兼盛家集

玉くしけ二むら山の月影はよろつ代をこそ照すへらなれ　堯孝

けふこゆる二村山のむら紅葉また色うすくかへるさに見ん

藻塩草　新六帖イ

時鳥ふた村山をたつぬれハミねをへたてゝ鳴わたるなり(かハすイ)　俊成

小侍従

二村の山のはしらむしのゝめにあけぬとつくるはこ鳥の声

萬葉　夫木イ　為家の歌なら八万葉集二十八入らし、三河国二葉松二十八為家と有り、万代集と有いかゝ　明玉

分てゆけハ二村山のこくれよりはゝそましりのあられふるなり(ているイ　ち)　為家　師光

伊駒山

加茂郡に在、足助より六里ほど北東、牛地村の地脉、高山也、俗呼びて駒山といふ、秋志野よミ命

詠歌大概

此歌ハ大和の生駒嶽

秋しのや外山のさとやしくるらんいこまのたけに雲のかくれる　後京極

月清秋

久かたの雲ゐに見えしいこまやま春ハかすみのふもとせけり　よミ人しらす

しはしとてとゝまる三かは生駒山こえもやゆかん遠き東路

雨山　額田郡に在　景物　ほとゝきす　ほたる　雲

万葉　夫木八イ　まつゝなけはや　と二葉松にあり　けはや　夫木　忠

雨山にきつゝなくらんほとゝきす声の色さへぬれわたるらん

なけはや　寅やうにおほゆ　此歌万葉集の風躰ありやいなや　為忠イ

夫木　廿　為忠朝臣家集三河国名所歌合　盛忠

五月やミはるゝまもなき雨山にいかにほたるのきえせさるらん

夫木　廿　盛忠

萩の山　宝飯郡萩村の山をいふ　景物　露　鹿　にしき

同　十二

ちりぬへき花のをしきにいつとなく　をりも

色〳〵のにしきとそミる萩の山のしからむ鹿や秋はたつらん

為忠朝臣家集三河国名所歌合　藤原道綱　経イ

同廿　白露は萩の山辺におきつれハすゝきくれなゐ玉とこそ見ん　高然法師

やられぬ萩の山哉

衣手山　加茂郡に在、挙母より南の山をいふ

同　十二　門妙社歌合　神祇伯　顕仲

衣手の山のふもとにたつ鹿のうちさ（らイ）ひしきハ暁のこゑ

懐中　よミ人しらす

きて見（ら）えんことをたのまむ（ぬ）身にしあれと（ハ）立そひぬへき衣手の山

渥美郡

和名鈔　高蘆（多加之）とあるは此山の事にはあらぬと見ゆ

高師山（遠江也）　八名郡嵩山村の地脉也、一説、たていはの東の山をいふ、古記ニよりて考るに、八名郡嵩山村の地ニ在て遠山の境山也、西表を三河の国の名所とし、東表を遠江国の名所とす、両国共名所和歌有、口伝、国名風土記三河ノ部にハ作ニ高石山ニ一、他（ヒト）の国にも同名所あり

続日本紀、天平神護二年十一月乙酉、和泉国人外従五位下高志毘登若子麻呂等五十三人賜二姓ヲ高志ノ連一

或人いはく、高師山ハ遠江の国の名所也と、同名所国々に多き事をしらす、国異にして同名所有、又国ハ同しけれ共郡異にして同名所あり、此類イ甚多し、先所謂高師山同名所四カ国に在、遠江也、三河也摂津也、和泉也、いつれも名所和歌有りて、和歌の浦、友千鳥集にゆつる、余ハ准之

海道記にいはく、豊川を立て野くれ山くれはる〳〵と過れは峯野の原といふ所あり越え、中略、頓て高師山にかゝりぬ、石利を踏て大敵山を打過れハ焼野か原に草葉もへ出て梢の色煙をあぐ、この林地を遙に行ハ山中にさかい川あり　これより遠江国にうつりぬ

海道記　鴨長明

くたるさへたかしといはゝいかゝせんのほらんたひのあつまちのせき

海道記にいはく、三河・遠江のさかひに高師山ときこゆるあり、山中に越かゝる程谷川のなかれ落て岩瀬の波こと〳〵しくきこゆ、さかひ川とそ云、此川をこゆれハ遠江の国也

同　藤原光行

岩つたひ駒うちわたす谷川のおともたかしの山に来ニけり

新千載

こえかぬるたかしの山はあけやらて霧の上なるミねの横雲　法眼　行済

（新続古今）

暮やらて日影はなほもたかし山おもふとまりや過てゆかまし　前大納言雅孝

花園山

額田郡村澄山也　花山　桜　桜狩　霞

奥山田村に属ス　景物　鶯　紅葉　里　時雨

八雲御抄五　はなその　参河　はなそめとも

旅衣いさ袖ふれん秋の草のはなその山の道をたつねつゝ　雅世

夫木　卅二　三河国名所歌合　相ノ

浅みとりかすめる空の絶間より梢そしるき花そのゝさと　為忠朝臣

夫木卅二　よそなから匂ふ梢も見るはかり霞なこめそ花そのゝさと　為経

夫木　卅

家集

しくれそむるはなその山に秋くれてにしきの色もあらたなるかな　西行（むイ）

夫木卅二

春霞たちかくセとも鶯のなく音にしるき花そのゝ里　盛忠

南朝一品征夷大将軍兵部卿尹良親王、
応永三十一年八月十日諸士ヲ卒テ三河ニ赴
玉フ、別ニ臨テ千野伊豆守ニ一首ノ歌ヲ賜フ、
「サスラヘノ身ニシアリナバ住モ
ハテムトマリ定メヌウキ旅ノ空、
信濃伊奈郡浪合ニテ自殺シ
玉フ時、「思ヒキヤ幾瀬ノ淵
ヲノカレ来テ此浪合ニシヅム
ヘシトハ、　堀川院百首

真弓山　設楽郡武節に在

後醍醐天皇の皇子

吉野宮　之義親王（尹良）、足利家に世をせはめられさせ給ひ、上野の国新田に赴せ給ふ時、三河の国武節の郷に入せ給ひ、真弓山の月を見たまひてよめる

ほの〳〵とあけゆく空をなかむれは月ひとりすむにしの山影（かげ）　之義親王（尹良）

下野ニ檀（マユミ）山アリ　ひきつれてまとゐせんとや思ふとち秋ハ真弓の山にゐるらむ　祐子内親王紀伊

烟巌山　鳳来寺山の惣名、則彼寺の山号とす

今橋といふ所にとまりて　あつまの道の記
うき世のことゝもおもひつらねて　「人なミにたゆとふことは古へもうき世わたりのかゝるいまはし　仁和寺僧正尊海
扶桑拾葉集　廿四日、今橋と申所にて　「君かためわたす今橋今よりはいく万世をかけてミゆらん　藤原雅世

霧やうミ山のすかたハ嶋に似てなミかときけは松風のをと　草鹿砥（お）公宣

飛鳥井二楽軒雅康卿也
宋世富士見道記　明応八年五月三日、富士歴覧のために都を思ひたち侍りて　中略　六月一日、今橋の里を尋るに、くれはとりあやに恋しくとよめりしなと思ひいでられて　「おそくとく植えおくなへも二むらに山の名うつす小田の面かも

今橋

渥美郡也、むかし今橋の里といひしハ志賀須香のわたし舟をつけし所なれ共今ハ吉田の城墨となる也

富士紀行

夜と共に月すみわたる今橋や明すくるまてたちそやすらふ　常光院

謡曲逢坂物狂　さゝかに
の蜘手にかゝる八橋や沢辺に匂ふ杜若　在原の中将のはる〳〵来ぬと詠せしも今身の上にしられたり、猶行末ハしらま弓矢はきの宿　赤坂松にかゝれる藤かえの梢の花を見やち山わた

延喜式神名帳、御津神社、和名鈔、御津（美都）文徳実録、
仁寿元年冬十月乙巳、三河国御津神授従五位下、

御津

宝飯郡御津（ミツ）山西南の麓にいはほの石畳あり、昔此所に
うと今橋打渡り雲煙の二村山ハたかしの名のミして野里に花やつゝくらん
別宮ありといへり、大恩寺裏山也、御津大明神の御詠歌と云伝ふ

△縦廿一丁横二丁雄亀島雌亀島アリ、弁天社ト云アリ

大嶋や千世の松原石たゝミくつれゆくとも我はまもらん

△

佐久嶋

幡豆郡に属す、勢尾参の海嶋三国三嶋の其一也
此島の山居のあはれなる小庵にてよめる

藤原雅康

関東記行

かくしても世はすまれけり山水の雫をさへにまたてやハくむ

大濱

碧海郡也、此邑に称名寺といふ時宗の古寺あり、是を指ならん、記にいはく、此所へ舟をよせて道場に暫やすらひ本尊の御前にて

同

大濱のなミちわけぬと思ひしにはやかのきしに舟よせてけり

鷲塚

碧海郡也、記にいはく、此里迄称名寺住持某見送りけれハ、此さとにてよめる

同

宗牧

君をおくるけふのわかれハ駒とめてうちての濱の心地こそすれ

称名寺住持かへし

君にけふあふ坂山は遠けれハこの別れ路に関守もかな

荻原　幡豆郡也　此郡に在

夫木　卅一　実方

風ふきぬうらみやすらんうしろめたくのとかにおもへ荻原の里

光廣卿の歌ハ、ちりふをちりうとたて入れ玉へり、本居宣長ぬしの字音、仮字用格にも、立りふとありて、知立も今書池鯉鮒も、字音ちりふ也、ちりうにあらず、延喜式、文徳実録、三代実録、知立

池鯉鮒　碧海郡也　倭名抄にハ知立とあり

こゝを御泊りにと有けるほと（程）に　記にいはく、此さとにとまりてよめる　光廣

言の葉のかけてたのまむちりうせぬ松かねまくらひとよなれとも

立、字彙、力入切林入声、和名鈔参河国碧海郡智立（チタチ）と訓しハ板本の誤也、チリフ也

春曙記

此池の鯉さへ鮒さへすめる世にあふやうれしき水の心に

岡碕　額田郡也　紀行

けさハなほいそき出ぬる草まくらわれをかさきに人のまつやと

小堀宗甫

紀行狂歌　澤庵

鉢ふくろ手をさしいれてさかせともなにをかさきの茶の銭もなし

衣の里、倭名抄挙母と書、と十葉松に有、源順倭名抄をいふならん

古事記、垂仁大仲津日子ノ命者、許呂母之別等ノ祖也、
又云次落別王者、
小目之山ノ君、三川之衣の君之祖也、
和名鈔挙母毛

衣の里

加茂郡衣をいふ、数十年已来改今ニ挙母ト

二村山よミ合　景物　梅　さくら　霞　卯花　ほとゝきす

千載　名寄イ　経衡

程ちかく衣のさともなりにけりニ村山をこえてきつれは

富士　堯孝

名にたてる旅の衣の里なにして露わけきつる袖やかさねん

紀行　雅世

賤女かうつや衣のさとの名をふく秋風のつとにしらせる

夫木　忠隆

白妙に咲かさなれる卯のはなハ衣のさとのつまにそ有ける

光廣卿春ノ曙記ニ、衣の里は、矢作の橋のかゝりたる河に付て、四里半北の山中となり、

同　卅一　平為兼盛

為忠朝臣家三河国名所歌合

東鑑四　十丁、元暦二年乙巳八月十四日　為二月十九日癸酉、其後熊野山領参河國竹谷蒲形両庄ノ事、有其沙汰、当庄根本者、開発領主散位俊成、奉寄彼山之間、別当湛快令領掌之譲附女子、始為行快僧都之妻後嫁前薩摩守忠度朝臣、忠度於一谷被誅戮之後為没官領、武衛令拝領給之地也、而領主女子、令懇望于本ノ夫行快云、早ク愁申子細ヲ於関東、可令安堵件ノ両庄、若然者可譲未来於行快ノ子息、女子腹云云就此契約、行快僧都ノ自熊野差進使者ヲ僧栄増所言上也、謂行快者、行範ノ一男、為六條廷尉禅門ノ為義外孫、於源家其好已異他、仍テ本自重之処此愁訴出来之間無左右加下知給ヲ且ハ又御敬神之故也云云

夫木　卅一

詠藻

夜をかさね深山立出てほとゝきすころもの里にきつゝ鳴くも

名寄

右川東武　具氏

立かへりなほミてゐかん桜はな衣の里にニにほふ夕くれ

同

さかりをイ

今よりハかすみもさこそ立ぬらめ衣の里に春の来ぬれは

夫木　卅一

春過ぎてなつのひとへになりなから衣の里は名こそかハらぬ　意尊法師

藤野村

為忠朝臣家三河名所歌合

八名郡下条郷藤ケ池村をいふ、村老の口碑にいにしへ御門へ藤の花を献りけること今も色こと成藤多し

宗國

むらさきのいとてりかくと見へつるハ藤野の村の花さかりかも

同　きしなくて藤野のむらのふちなミは松の梢にかゝる也けり　道経

堀川院初度百首　紫の藤野の村に

あくかれて花のかさしを家つとにせむ

竹屋里

宝飯郡也　今作竹ノ谷ニ

為忠朝臣家三河國名所歌合　竹屋里

藤原道経

みとりなる色もかハらてよのつねにいくよかへぬる竹の屋の里

同　すみよしの松のたくひとおもハゝやそまにもよせぬ竹の屋の里　琳賢法師

星越

宝飯郡　美客（ミヤ）養ノ郷三谷村と大塚村とのさかひ

すこしき山坂也

谷宗牧

さすか人のなくて別れしたひねにも名残ハさそな老のほしこえ

紀行

○小松原

為忠朝臣家三河国名所歌合

夫木廿二　清輔

行末のはるかにミゆる小松原君か千とせのためし也けり

同　道経

立かへりまたもあはまく星こえやかす／／あかぬ老の坂かな

紀行　浄友

神代より生ひやそめけん小まつ原いく千代へぬと忘る人そなき

かはれとも昔の宿のゆかりそと紫匂ふ藤川の宿

藤川

額田郡也

むかしハうちかハともいひしとなん

紀行

○篠塚　和名鈔　篠塚（カヤ）郡

大和物語、忠文がミちのく乃将軍になりて下りける時、それがむすこなりける人を、監ノ命婦忍ひてあひかたらひけり、馬のはなむけニ、めとりぐゝりのかりきぬノうちき、ぬさな

堯孝

誰か住むミやこのたつミしかはあらてこや東路のうちかはの里

風土記　篠塚郷　公穀六百九十二束三毛田　假粟五百六十三丸三字田貢松作杉梅楊等　又出桑麻（編緝カ）絹等

どやりたりける、かの
えたるをとこ、
よひ〳〵に恋しさまさる
かり衣心つくしのものに
そありける、
とよミたりければ、
女めでゝなきけり、同　　同
し人ニ、監命婦山もゝをやりてけれハ、
みちのくのあたちの山もゝ
ろともに、こゝハ別のかな
しからじを、となんいひ
ける、さてつゝミなる家に　　同
すみける、あゆをなん
とりてやりける、
加茂川の瀬にふすあ
ゆのいをとりて、ねてこそ
あかす夢に見えつや、
かくて此男ミちのくへ下り　　同
けるたよりにつけて、
あハれなるふミともを
かきをこせけるを、
道にてやまひして
なんしにける、女
いとあはれとなんおも
ひける、かく聞て後、し
のづかのむまやといふ
所より、たよりにつけて、
あハれなることゝもを
書たる文をなんもてき
たりける、いとかなし
くて、これハいつのそと、
とひけれ場、つかひの久
しくなりてもてきたる
になんありける、をんな、
「しのづかの馬や〳〵とまち
侘し君ハむなしくなり
そしにける、とよミて
なんなきける、わらハにて
殿上して、大七といひけ
るを、かうふりして、くら
と所におりて、かねの
つかひにかけて、おやのと
もにいくになんありける、
此物語の篠束、同し物
語和抄に三河と有、

山中

同郡藤川宿と宝飯郡赤坂宿との間をいふ

おほつかなこの山中に鳴鹿のたつきもしらぬ声のきこゆる　　雅世

旅衣たつきなしともおもほへす民もにきハふ山中のさと　　堯孝

関口

宝飯郡長沢村の地中、関屋といふ也

道ひろく治れる代の関口ハさすとしもなくもるとしもなし　　同

赤坂

宝飯郡也　赤坂といふ旧跡宮路山のうちにあり

東鑑に見えたり

鴨長明海道記にいはく、九日矢矯を立て赤坂の宿を過、むかし此宿の遊君花の顔春こまやかにして蘭室秋かうはしき女有けり、皃を潘（原字ノマヽ）安仁ケ弟妹にかりて、契りを三河吏の妻妾にむすへり、妾は良人に先て世を早ふし、良人ハ妾におくれて家を出しらす

利生の菩薩の化現して夫を導けるか、又しらす円通大師の発心して妾をすくへるか、互の善知識大なる因縁あり、彼旧室妬か呪咀に抃舞（べんぶ）悪怨かへりて善教の禮をなし、異域朝潮の軽仙に鼻酸持躰（鉢）忽に知行の徳にとふ、巨磨（唐）に名をあけて本朝に誉を留る上人誠に貴し、誰かいはん初発心の道に入ル聖なりとハ是則、本来仏の世に出て人を他（化）するにあらすや、行々むかしを談してなほ〳〵今にあはれむ

海道記　　鴨長明

いかにしてうつゝか道をちきらまし夢おとろかす君なかりせは

藤（源）の光行海道記にいはく、矢作といふ所を立て宮路山をこえ過るほとに赤坂といふ宿あり、爰に在ける女ゆえに大江定基か家を出けるもあはれなり、人の発心する道、其縁一にあらねとも

今昔物語に、三河守大江定基ハ、参議左大弁式部太輔済光子也、（原の書）円融院の頃の人也、或時妻を具して参河の任国に下る、妻病を受て死す、定基是を悲ミ、且其國の人民殺生を好を見て弥道心おこりて出家す、名寂照と、其後震旦ニわたる、云々

あらぬ別れををしミしまよひの心をしも通し、まことの道に赴きけんもありかたくおほゆ

同　東関記

別路にしけりもはてゝくすの葉のいかてかあらぬかたにかへりし　源光行

夫木　六　海道宿次百首　赤坂

外山なる花はさきからあかさかの名をあらハして咲つゝしかな　為相卿　よみ人しらす

白妙の雪も埋ぬあかさかや名にさく花のつゝしあらまし　澤庵

三河名所歌合

夫木　廿一

あかさかをすみのほるよの月影に光をそふる玉さゝの露　為忠朝臣

同

秋きてそ見るへかりける赤坂の紅葉の色も月のひかりも　盛忠

御道中記　家光公御上洛、吉田御とまり、赤坂御通りの時

雲はれて日ハあかさかの星といへとたひの行衛の道のなかさハ　家光公　宗甫

草まくら露けき宿を立出て夜ハほの／＼とあかさかのそら

近衛関白　基熙公

赤坂御止宿にて

赤坂と聞つる里ハ紅葉に（二）にて夕日かゝやく名もやありけん

御油　宝飯郡也

言の葉にむかしおほえて折にあふ名も赤坂のつゝし咲頃

澤庵

御馬　同郡也

紀行

野飼するときし待えて名にしあふおむまの里にいさミやすらん

宗牧

おなし里の浜辺にてよめる　題しらす

古今歌集　雑歌　藤原興風

わたつ海のかさしにさせる白妙の波もてゆへるあハち嶋山

わたつミのかさしにさせる白妙のなミもてをへれ潮（ヲキ）つ嶋山

宗長

「此歌ハ可去

私にいはく、此歌、古今集第十七雑部に入歌のさま、さも似たり、書たかへたるにや、しかれとも多年此通りに書つたへけれハ其まゝしるす

吉田　渥美郡也

いにしへ今橋の里といひし所也

吉田普門山観音寺、本尊ノ厨子再興ス、組物彩色ノ下ニ「寿永壬寅歳京師四条通之仏師松川多門、銀二貫百目ヲ以造之」ト飛々々書アリシ由、此時ノ細工人心得モナク、又其マヽ彩色置シ由、彩色残サルハ残念也、シカシ彩色ヲソロ〳〵トレハ、全ク此書付きアル趣也、文化二乙丑ノ三四月ノコト、

原本にハ貼紙

東海道名所記、宿ちかくより雨すこしつゝふり出けれは、男も楽阿弥もしとゝにぬれてゆく、宿のうちに入てミれは、笠さし足駄はきて行人あり、男かくそうらやミける雨にけふ所の名をもかへてましよし田の宿にあしたをはけは

烏丸光廣

思ひやるけふハミやこの神まつりこゝを吉田の里ときくにも

小野阿通と有り

小堀宗甫　小野通女也

故郷（我）のさとの名なれはなつかしやよしやミやこの吉田ならねと

近衛三木信尹公号貘院

馬（水）かへてまたまくさかふたよりよしたのもゝちかし（そき）やとのわたりも

夢とてもよしや吉田の里ならんさめてうつゝもうき旅の道　小堀宗甫と有り

よし田のわたりにて
ひるまのやとりせしとき
水かひて
また秣かふ
たよりよし
田の面に
ちかき
やとのわたりは
慶長十年之すえ

□

大岩　同郡也

紀行　堯孝

君か代はかすもしられぬさゝれ石のみな大岩の山となるまて

二川　同郡也

小堀宗甫

国ハ三かわ里ハふたかはあはすれハいつかはかへりつかむ故郷

紀行

土御門従三位治部郷安倍泰邦卿、宝暦十年正月、東行之駄説ニて、去ル延享の比、中原師守か、しハしは爰にかり枕と枕尽しの一首を詠して契りをこめしは、いかなる女そやと訝るに□たり、「爪はつれ綺麗にしま七身のまハりよしや吉田のかミいはぬ夜も、

烏丸光廣

玉くしけけふふたかはのあけゆけはこれも三かはの内とこそきけ

天明六年丙午閏十月三日、女院使芝山宰相持豊卿、関東より御上り吉田大木十右衛門宅に御とまりにて

たち出む名残そあかぬ旅の屋と愛(め)てしもふけのふかきなさけに

長良長彦　八名郡

正宗

はる／／と年もはるかに見ゆるかな長良の村の長ひこのいね

往頃、芭蕉翁我國国府の邑白井梅可の許にしはし客たりし時、此さとの何かしか井の中へ鳴神落くたりしを、人々集まりてあやしき麺（めん）板やうのものにて、蓋して置たり、此事を近きあたりにかくれなく雷をいけとりにせしと聞え侍りしかは、おきなも梅可のあなひにて此里に来り、彼ゐのもとをたつねもとめて、あるしに乞、ふたをとりて見れとも一物なし、主と共に三人（ミタリ）てをうちて笑ひ、俳諧歌一首をつらねてかへりけり

桃青

あかるへきたよりなけれは鳴神の井とのそこにて相はて二けり

右の事、翁筆をとりてことはかきしてあるしのもとに

置れしとも梅可の方に在しともいへり、なれともいつしかまきれうせぬ、其時のうつし書梅可の才に有て歌計りをしるすのみ

いはしの原　**景物**　玉柳　ほとゝきす　すこき　鹿のふしとなとをよめる　**稲葉山**　**柳の室**

宝飯郡カ　**依網**（ヨサミ）　幡豆郡か　**國府**　宝飯郡か　**はらこ崎**（たイ）　**嶺野**

寺　上にいふ嶺野成るへし　**渚乃杜**（ナギサノモリ）　**長篠**　八名郡か　**望理**（モリ）　宝飯　（＊雀部郷「散々倍」）

萑部（サ、ベ）　**秋志野**　加茂郡生駒山に近し　**渡津**（ワタフド）　碧海郡成るへし　ワタンド　ワツフヅ　順和名鈔ニハ望理

和名鈔宝飯郡渡津和多無都

萑部　渡津　以上三所共宝飯十二郷の名なり　**碧海**（アヲミ）　三河八郡の一也　アヲミ郡といふ　**恋路濱**　**秋志野**　以上二所ハ

和名鈔阿乎美

伊良虞双紙に見えたり　**皆見**（アタミ）　**藍原**（アイハラ）　**老津嶋**　渥美郡大津村・大崎村の海辺に堆々たる嶼有てむら／＼と生茂るよみ合に見へたり

ヒラシマ

按スルニ、今地境をあらそひ、大崎村にむかふ所を大崎しまといひ、大津村ニむかふ所を大津しまといふ、古記に便りてミれハ、すへていにしへの老津嶋なり

右所記名所、諸書に出たれ共証歌未考之、後人宜考之

「左括弧内の文章ハ原書ニ貼紙ニテアリシモノ」

武蔵野路草、こいをすぎて、よしたの里にいたり、しばし休らひて、つきにしつえをミれハ、をのゝえのくちたらんやうにたゝれたり、はる〳〵ときぬる事よとおもほゆ、さいつころからす丸光廣卿の、此さとにて「思ひやるけふハ都の神まつりこゝをよし田の里ときくにも、とよめり、これらハ末の世の歌まくらともならむかし、

駅程遠留吉田中、此里同名在洛東、疲節爛時思斧柄、人間仙境一蒼穹、

都をはおもへはとほし同し名のよしたにつきし杖もたゝれて

道春先生、丙辰記行云、しほ見坂より二河のあいたに、纔なる溝あり、是なん遠江・三河の境なりといふ、いつそや菅野の真道か史見侍りしに、持統天皇、三河国に行幸ありとしるせど、いづれの郡郷、いづれの村里といふなをしらす、真道ハ光仁・桓武の時なれハ、世久敷して、しらさるや、事略して、書もらせるにや、口惜、

参河　林道春

先王若要慰民生。　定有壷漿簞食迎。

遺恨翠華巡狩跡。　未聞行在頓宮名。

同内辰記云、江戸より京までの間に、大橋四あり、武蔵の六郷・三河の吉田・矢矯・近江の勢多なり、ひとり矢矯のミ土橋なれハ、洪水によりて絶る事あり、此頃新に板はしとなりけるにや、爰にしも誰か周處が三害をやめて、留侯か一編を伝むや、

吉田　　同

再遊記行
吉田川旧謂二之ヲ豊川一ト一、今此川以北所二一里一有リ二豊河ノ地名一、而非レ河矣、蓋風土記所レ謂豊河エ長者任処也、　山崎闇齋

行々何ノ日カ窮ラン。　相送ル数州ノ風。　馬ハ過ク暁霜ノ上。

東西釣命置動シテ伝、表道青松成レ別連、風色正豊風水請、吉田城下吉田川、

龍ハ横フ道路中。　川流無二昼夜一。　人物有二西東一。

一枕還郷ノ夢。　家書久ク不レ通。

江東吟稿　平岩仙桂

鶏鳴鐘度出二残宵一、人跡清霜曽不レ消、波爛宛連彩虹ノ影、料知ル第二吉田橋一、

同　　林　林春齋

吉田昔日戦攻ノ場。　一旦功成テ洪祚長。

行客憑テレ誰ニ誇ラン二子産一。　勝レリ三於溱洧ノ不ルニ二橋梁一。

紀行　小堀宗甫

雲晴て日当赤坂の里とへハ
旅の行への道のなかさは

長沢　道春先生丙辰記行載此詩

昔在轅門見二玉鞍一。　豈図ランヤ今日泪□濕欄干。

（此文字朱書　道春　春齋）

林間應二是甘棠ノ意一。　遺愛歳寒シ千百竿。

岡崎　　同

黒-世先-君多シニ戦-功一。　岡-崎城-郭聳ニ蒼穹ニ一。

国-家根-本従レ茲始。　欲下唱ヘニ幽-風ヲ一歌ント中大-風ヲ上。

丙辰記行云、矢矯ハ、岡崎の西一里ハかりにあり、建武の時、足利氏鎌倉にありて、天子の命にたがひしかバ、新田氏節刀使を奉て東征し、此所にて鎌倉の軍兵と戦勝て、鷺坂まて逃を追打て、官軍利を得し所なり、後に箱根竹ノ下の戦に、官軍敗績して、中書王のはしり給ひし事こそ、まことに不幸ならすや

矢矯　　林道春

森-々タル白-刃是レ昆-吾。　波ハ激ス河-辺千-万-夫。

恩-賜ノ旌-旗如ニ日-色一。　東-隅難レ得矢ニ桑榆ヲ一。（雖）（失）

丙辰記行云、三河国八橋は、杜若の名所なる事、在中将の歌にてかくれなし、今岡崎より池鯉鮒にいたる、道より北の方一里ハかりに、それなん昔の八橋なりとて、所の人はるかに指をさしてをしへ侍る、久敷田となりて今は杜若なし、三四年前、余か作りける詩にも、古人ノ遺跡鉄爐ノ歩、只有ニ三河杜若ノ名一となん

八橋　　同

六-々歌中第幾仙。　風-流千-歳慕ヲニ幽-玄ヲ。

世-間一-瞬皆陳-跡。　杜-若ハ為レ薪ト澤ハ作レ田ト。

癸未記行　春齊

八橋

八橋杜若是名區。
杜若久枯橋亦無。
今日如シ尋ニ鉄爐歩一。
野人指示セン一平蕉。

池鯉鮒

土人曰有レ社々中
有レ池多ニ鯉鮒一
池中水泌々。鯉鮒神ノ
所レ使。物理本無レ窮。
霊動活溌地。

八橋

在-五中-将元ト薄-情。　當-時艶-麗以レ歌ヲ鳴。
今尋ニ遺蹟ヲ一鉄爐歩。　只有ニ三-河杜-若ノ名一。

題八橋杜若

薄-暮一-樽ノ酒。　対レ花ニ遣レ興ヲ多。　緑-衣牽ニ水-帯ヲ一。
紫-晩襯ニ雲-羅ヲ。　未タレ入ニ函-三ノ詠。　唯傳ヲ在-五ノ歌。
縦ニ楊ニ奪レ朱ヲ色ヲ一。　莫レ厭フコト醉-顔。

寛永五年於赤坂宿鶏且偶　　江月叟

客舎坐成金玉楼。　三元好是祝三州。

為寿墓　尾見衛盛

国色速人誤幾生当時
年少競通情峨眉翠黛
今安在石上空残倡婦
名

癸未紀行
矢矯橋　春齋

臥波二百弓、
形勢與天通、
野草感朱雀、
澗雪落彩虹、
板橋霜尅満、
銀漢月猶濃、
富乗□連過、
思於驢子窮、
東兵屯要害、
中将統元戎、
矢矯無情水、
河流今古同、
同
二川東辺有
小溝、黒人曰、此
即遠参二州之
境也、
遠参自此分、
一派水法々、
若把中華比、
対驢似漸□

伝聞東照生縁地。　靄々韶光仰相攸。

和前韻慶安二孟陬十九日　江雪宋立

赤坂村頭売酒楼。　客床既酔忘侘州。

家人相対傾尤瞻。　正是老師投宿攸。

同和慶安四辛卯五月六日　江雲宋龍

洛陽城裡出高楼。　拄杖（ちゅじょう）抹過三五州。

昔日先師宿斯店。　雲間松老相其攸。

同和同日

堪笑客尋莅少楼。　似将騎鶴下揚州。

小僧不問隣家美。　活眼老師曾相攸。

明暦中朝鮮國上官赤坂駅某之亭

誉庭前枯木即作題壁上贈主人

君平乗世桑茲去。　旋作仙峯落此庭。

最愛窓前春一色。　瓊林珍樹雪中青。

明暦三丁酉五月十二日宿赤坂宿主治具

叮嚀設薬石且忘路難靠錫仍以小詩

感情之深密云　前住宝峯似王道人乱道

情前一宿黒生縁。　店主尽情賑暮烟。

唾々猶言唇朱湿。　依然明日説齋筵。

御油

蒼生口譜聞来由。　昔貢シテ御油名御油。

聖化流行ス我王ノ力。　扶桑六十有余州。

寛永廿一甲申歳三月十六日

改正保元年　澤庵埜老書以直別卿長云

本朝文粋　巻之十十二張

慶保胤、六十四代円融帝天禄頃ノ人、天禄元庚午ヨリ享和二壬戌マテ八百卅三年、此詩序、凡八百年前ノコト

薬王寺旧跡、碧海郡下重原村（シモシゲハラ）ニアリ、信長公之時、退転し本尊今尾州ニアリト云右浄賢寺了願西三河ニて聞タル話

晩秋過参州薬王寺有感　詩序　慶保胤

初巻総目録ニハコノ二字アリ

参州碧海郡有一道場。曰薬王寺ト。行基菩薩昔所建立也。聖跡雖レ旧。風物惟新。前ニ有碧瑠璃之水。後ニ有黄纈纈之林。有草堂。有茅屋。有経蔵。有鐘楼。有茶園。有

薬圃一。（白）眉颯爾タリ。余ハ是羈旅之卒。牛馬之走。初テ尋ルノレ寺次テ逢レ僧ニ。庭前ニ徘徊シ。燈下ニ談話ス。耳目ノ所レ感。聊記ストニ斯文ヲ一云レ爾。

此文字白、黒ヲ以テ抹消シアリ

讃岐丸亀城主
京極備中守高豊朝臣之臣井上儀左右衛門ノ女
通下云フ、帰家日記上中下三冊板本アリ、
元禄二己巳夏六

月十一日、江戸ヲ出立
昼のほとしはしやすむ所、ふた河といふ、よし田は市店を通ていとなかきはしに至る、只今わたるはし漸ふるくなれりとて作りかへらるゝなり、大きなる木とも引かけ、けつりまろはして、たくミともをはしめ、人おほくつとひてとよみあへり、いま渡るはしにも人々あつまりてこれを見る
御油より赤坂にゆく、客亭いとにきはゝしくたちならひて
家〳〵の女とも旅人を呼ひいれとゝむる声かしましく、小田の蛙の夕暮に啼心地す
強テ呼二旅客一家々女、
粉面朱唇巧納ルレ交、
寓舎今宵何処好、
共言有レ酒有二嘉肴一
こよひは赤坂にやとる、あるしの女房　義ものにて我何となく
此処一字か虫食
硯にむかひて物かきすまむを
ゆかしかりて人しつまりてわかき

名所連歌　同　俳諧

牛久保熊野権現（ユヤ）の桜の下にて

花さかりこゝろもちらす一木かな　牧野　古白
おほろけなから有明の山　柴屋　宗長

三明寺弁財天に詣て

しるしある池のこゝろや秋の月　宗長　祇イ

大濱称名寺住持にあふて

かきくつし埋火つくすむかしかな　谷　宗牧

深溝大炊介好景にあふて

女の宵よりきたりてつかふるにあないさせて出きたりぬ、なにやかや物かたりして、手習いのほぐ（反古）ともをせちにゆかしかれは、詩や歌やかきてやる、よろこぶ事かきりなし、其の身の有さまなと語りて、はやうかゝる事とも及はすながら心よセ侍つるを、おもひの外なるよすかにつきて、かくかしかましき市の中のすまゐほゐ（本意）にもあらすおもひ侍る、なといふ、おやのさとハいつくそ、といへは、三河の国八ツはしのあたりとこたふ、今もむかしの詠ハありやととへは、八つ［］はしの柱にやかたはかりに残れ［］るを、其あとゝ申つたへ侍る、なりひらの塚も侍とかたる、業平ハそこにて終り給ひしともみえさめるを、さる人の通りかてになかめたまひけんあとなれハ、後のよまてのしるしにしをき侍るにや、とおもはる、やゝありて帰ぬ、鳥もほとなくあかつきを告わたれは、起出て、十八日例の明ほのゝころほひ、やとりを出つ、よへの女とも名こりおしむめり、ひち河といふさとの名をきゝわたりてをか崎にいたる、この国の御城うるはしく見ゆ、駅亭長くつゝきて町たてわたしたるあき物する家いエもさま〳〵行きかふ人のめとゝむへき物ともかさり置ていミしうにきはしきあたりなり、矢はきをすきてよへ聞し八橋はちかきほとゝきく、いにしへの跡とミかハの八橋にその名はかりを□や□□らんちりふより云云

芭蕉翁発句集、元禄七甲戌年トアリ、翁此年十月十二日没

花かともいふまて雪のまかきかな　同

西ノ郡先應寺にて興業

鐘の音もなかハは雪の深山かな　宗牧

雲水も雪にはれたるあしたかな　同

八はしの里にて

から衣首をかたけて頭巾かな　義空

かきつはた花に水ゆく沢辺かな　宗祇

御油より赤坂にいたるとて

夏の月御油より出てあかさかや　桃青　発句集か　諸集や

西ノ郡藤助旅宿にて

春風もさかひを雪の柳かな　宗牧

ふりもつめ雪こそ礒の草葉かな　宗牧

賀茂郡二村山にて

程もなくけふの日かけもくれは鳥　融覚

たゝにやこエんふたむらの山　同

声いつれニ村山のほとゝきす　昌澤啄

露しくれふたむら山の紅葉かな　宗祇

それかしの村にて宗長の忌日をむかへて

冬ハ梅こゝろをとむるにほひかな　宗牧

たつあとを鴛なく雪の友ねかな（共）　同

富永菅沼織部介入道にあふて

あはてたにかへるさいかに雪の友　宗牧

三渡野勝山城主熊谷越後守館にて

あふちさく雲ゐをちりのふもとかな　柴屋宗長

大日本国三州渥美郡大津郷長松山太平禅寺
再興鋳鐘銘曰
全躰圓成　炉難再興
撃之昏晦　響徹八紘
貴賤側身　人天発盲
華鯨殷々　仏法永栄
時明応第四乙卯稔時月如意珠日
住持比丘宗観

須弥南畔扶桑国東海道三川州
八名郡賀茂下上大明神宮前之金
鐘者郷中之氏子神主等為心願成
就、以至誠心命踏鞴者鎔鋳之、
夫鐘者拘留孫於乾笠自従
造之以来伝三国徳用不可数勝
利益群類無先於鐘矣豈不成
就心願耶
組時寛永十五丙子卯月吉日
氏子神主等敬白
大工中尾越後守藤原朝臣勝重
右大伴大明神ノ鐘　高　二尺八寸
ワタリ　二尺
厚　二寸一分
同社太刀一腰銘
文明六年八月　日
薩州波平吉行

吉良東城の城にて

藤なミやさかりかへらぬ春もかな　同忠定イ

なミやゆく春のかさしのわたつ海　同

市田村牧野四郎左衛門館にて

行袖を草紫のたけの夏野かな　同

伊奈村牧野平三郎宿所にて

沢の上山たちのくる春田かな　松平大炊介忠定

刈谷水野下野守（和泉）宿所にて

風や春いその花さく澳つなミ　宗長

深溝大炊介宿所にて

しけりあふ梢の夏の外山かな　同

御馬の邑に来りて

若草のつまやおむまの嘶（イバフ）声　同

伊奈を出て御馬の浜辺に来り

卯の花やなミもてゆへる沖つ嶋　同

御馬八幡宮の宝前にて万治元年八月十五夜會

今宵月のかつらの花に秋もなし

月の名もたかき雲ゐのみやこかな

元禄四未年

鳳来寺に詣て坂下（モト）の吟

木からしに岩ふきとむ（か）る杉間かな　桃青

元禄四未年

鳳来寺麓に参籠して

かとやに一宿して

夜着ひとつ祈出したるたびねかな　同

陸奥千鳥ニ祈り出してトアリ

諸集寒哉とアリ

貞享四丁卯年

三河の下地の茶屋にて

下地村にて越人と一夜あかして

松葉を焚（こを）て　同

松葉を焚てノ次ぎニ　〇越人と吉田の駅にて

寒けれと二人たひ寝そたのもしき

笈日記ニ旅寝はおもしろき

□夢再校蕉翁発句集
貞享四丁卯年

麦はへて能隠家や畑村　はせを
冬をさかりに椿咲也　越人
昼の空蚕かむ犬の寝かへりて　野仁
宮川善右衛門所持

貞享四丁卯年
○伊良古崎江南の海の果にて
鷹のはしめて渡る所といへり、
いらこ島なと歌にもよめり
けりと思エハ猶あはれ成る
ためし、鷹一ツ見付て云々
○あまつ縄手海より吹上る風
いと寒き所なり
すくミ行や馬上に氷る影法師
笈小文ニ冬の日也

菅沼耕月亭にて
京に　此　冬住居　はせを
桶　田楽の　耕月　はせを
そハ〳〵と　人の　白雪
雁　成けり
鍬のひより　月
う□□　を　セ　翁
古白雪ノきれ〳〵集ニ載虫クヒ残り

今橋牧野田三館にて興行

柴屋

けふさらにさつき待花のやとりかな　宗長

庵を尋ねて
杜国か畠村の隠居にて
されハこそあれたきまゝの霜の宿
麦は盈へてよきかくれ家や畠むら　桃青

元禄四未年
いつれの御代とはしらねと、院の住せ給ふホとびて野に□（厨歟）なといふ名も残り、いとかしこき御事におハしませはは
はたけ村を出て保美村にて
梅つはきはやさきほめむほひの里　同

いらこさきにて
鷹ひとつ見付てうれしいらこさき　同

ふたゝひ伊良虞にまかりて
いらこさきにるものハなし鷹の声　同

元禄四未年
新城の家中菅沼権右衛門宅
菅沼耕月館にて
京（畠歟）にあ（飽）きて此木からしや冬住る　同

此里をほひといふ事、むかし
院のみかとのほめさせ給ふ
地なるによりてほうひと
いふよし里人のかたり侍る
を、いつれの文に書とゝめた
るともしらす侍れども楽し一某カ、
これ覚エ侍るまゝに
梅つはき早咲ほめる保美の里
いらこ崎ほとちかけれハ見に
ゆき侍りて
いらこ崎にる物もなし鷹の声
武陵芭蕉散人桃青印
家田与八郎所持

鳴海春麗国所蔵
道の記
よしたにとまる夜　はせを

寒けれとふたり旅ねそ　たのもしき　越人

こがらしに菅かさたつる　たびねかな
あまつなわて　はせを

さむき田や馬上にすくむ　影法師

伊良湖に行て　越人
酔て馬に乗る　同

ゆきや砂むまより
落よ酒の□

鷹ひとつみ付て　同
うれしいらこ崎　越人

冬海や砂吹あける　華のなミ
はせを

麦はへて能隠家や　畑ケ村

冬をさかりに椿咲也　越人
昼の空のみかむ天の　野仁
ねかへりて

右同年
三河にて白雪といへるものゝ子二人に桃先・桃後と名を付あたへて
新城二字白雪方にて
此処文字ノ半虫食、太田カ大内カ吉田トモ推シ侍ルヤ

のにほひ桃より白し水仙花　桃青

此処一文字虫食、花ナル様ニ見ユ
我国なる人のせし會に

春雲ハたゝはなそのならぬ山もなし　宗祇

永正十五年卯月廿三日、桑子村妙源寺ニて柴屋宗長

松平出雲守長親公住持秀蓮三吟

賦山何河カ

とこなつに庭のちりなきこゝろかな　宗長

松に木高き風の涼しさ　秀蓮

ほとゝきす有明の月に声ハして　道閲

刈谷水野荘九郎宿所

朝霧ハなミもてゆへるまかきかな　宗長

参河国八名郡宇利庄
宇利村興貴山富賀寺鐘銘曰
一願皇帝万歳
二願重臣千秋
三願衆生安楽
聞鐘声煩悩軽
智恵長菩提生
離地救出火坑
願成仏度衆生
宝徳二庚午十二月廿一日
大檀那直満建部為幸入道

刈谷水野和泉守館に逗留して

春くれぬ時鳥はた初音かな　同

一色それかしの館にて

大そらの春の色まつ小草かな　宗祇

牛久保若宮の宝前にて

きのふけふ若葉なりしか杉の森　古白

八橋の里ニて伊せや尾張の海つらを見てといふことばをかりて

かきつはたかたるもたひのひとつかな　桃青

雨山合戦にて討死の時辞世　菅沼新八郎

矢をしきていまにいのちハつきゑ弓のつるもろともにきるゝわかいき　定村三十六歳

本宮の雪を見て　宗牧

詠つゝわかれんかたもなかりけり
汀の氷峯の白雪

返し　持千代

立わかれゆくらんかたの峯の雪
汀の氷思ひテそやれ

赤坂妙寿院為寿墓

遠き世の跡も今はたしたはれぬ名にたつ〇石歟のかけを見るにも　遠江浜松　杉浦修理

和漢三才図会六十九三河

三頭山長福寺　在赤坂鎮西寺領三石五斗　在宮地山之麓当寺ノ境内山上有歌石、名女郎石、相伝昔此処ノ駅有女名カ珠女、與定基有レ契、而絶不レ逢、慕病遂死ス、神魂化レ石、大尺余、下穿高四尺計、如仮立、而不レ知其深長幾等云、人試堀見レ根、去レ土丈余、未レ至其株而込焉、與常州鹿島之要石、形似而趣□異、松浦佐用姫大磯虎女中華江南ノ望夫石等、皆愛着ノ女化レ石之類不レ少、

これもまた石にそ残る松浦かたその名にたちしたくひならねと
　　同　柳瀬美仲

きけをは今その面影もしたはれぬ名に立つ石のむかしかたりを
　　吉田侯臣秋山源右衛門母　紅葩尼

いにしへの花のかさしの跡とめて光りをのこす玉かしハニも
　　藤川　天野良尚

哀れなり幾世の苔の石ふミにありしその世の名のミ残して
　　吉田侯臣　尾見与兵衛

霜かれぬミとりのむかし移し来てふかくも草に埋む古塚
　　同　小笠原源太夫

此里にたよりありてや年経ともたらぬ契りを石に残して
　　吉田　田中友八橘宣元

名にしおふそのうかれめの形見とてすかた清けに残る石ふミ
　　同　田中近郷橘宣仲

天津星かりに契りをむすひてやかたきミさをの石となるらむ
　　土呂　宗弥

いにしへのちきりもかたきしるしにや今しも石に名を残すらむ
　　伊勢山田　久保田倉弘篤

松蔭の苔の下にもてらす名のちとせをかけし秋の夜の月
　　東部　惟水

吾国の名所和歌いにしへよりあり、又中比の和歌もあり、これらうかゝひミるに、詩歌連俳に入

とともに指をかゝめてかそへにたれは、名所すへて五十・六十にあまれり、是をあつめて和歌二百二十余首、からうた十六章、連俳五十句に及へり、されと余、生れぬる貞享元年よりこのかたの歌をはのせす(載)(ず)、詩連亦しかり、三ツ河のなかれの水、渥美・宝飯・幡豆・碧海四ツの郡にあつまるにひとしけれは、これを三河藻塩草と名つく、さりなからこれのミにかきるへからす、筑波山のかけしけく(繁)(蔭)、奥津の濱のまさこのかす(真砂)〳〵多きためしなれは、こふらくハ後の人我こゝろさしを(乞)つきてもれぬるを補ひたまハゝ幸ならん(洩)(継)

元文はしめのとし　　渡邉氏

富穐誌

此書をつゝらんと年月賤(しず)か心をいこましめ
今幸に出来しまゝに拙者筆をとりて戯にか
くなん

敷島の道しるへなりもしほくさ三河の海の波にうかひて
書うつすことのはくさを我後ハかたみとも見よ水くきのあと

此和歌集者往元文元年夏日成授于我党之小子
也、一日客来閲此書乞余書写斯一編與之不肖固
辞雖然従来方外知音不得已応需磨磋老眼採筆
塗糊以塞其責而已矣

渡邉氏

老龍潭魯聵

□翁七十八歳　誌焉

（□は禿に鳥「とく」＝禿　はげ頭の老人）

宝暦十一辛巳春二月中浣日

○兎足神社鐘銘　○鰐口銘　○大般若経年号

参河国宝飯郡　渡津郷

兎足大明神　洪鐘

右為志者天長地久仰願円満土安穏諸人快楽

所奉鋳也

大工　藤原　助人

勧進聖見阿弥陀佛

檀那朝阿弥陀佛

応安三年庚戌十一月　日

応安三年庚戌年至
寛政四壬子年　四百
二十三年

奉造建鰐口

三河国神戸郷一味山永泉寺現安穏後生善所

致言心誠者也

永泉寺之鰐口今二在斯社一也

文亀三癸亥年至寛政四壬子年二百八十九年

文亀三年癸亥仲冬吉日

願主守阿弥陀佛

安元二丙申年至寛政四壬子年六百十七年

大般若経奥書

安元二歳丙申二月廿六日

筆立願主大法師　覚慶

○御津神社鐘銘　○鰐口銘

日本国三川州御津庄

大明神洪鐘也　述一偈而銘也

洪鐘一口。脱体円成。河津竜宮。□得華鯨。声音忽落。

殷々鏗々。耳処湛寂。群有睡驚。一根纔脱。六華盍清。
沙界聳聴。庄境誇栄。民長民伯。政家々平。寅昏幾許。
願心呈誠。塵々入理。歴々分明。

享徳元壬申年至寛政四壬子年
三百四十一年

享徳元年壬申十月十五日

当庄刺吏細川兵部少輔源朝臣

大願主藤原政家

鰐口

奉寄進三州御津庄船主大明神御宝前

治工　北金屋村中尾作右衛門重次

万治三庚子年至
寛政四壬子百三十
三年

于時万治三庚子暦三月十五日　惣氏子敬白

引書（いんしょ）解題

三河藻塩草本文に記載されている引書の簡単な解説を以下に記す。

日本紀（にほんぎ）　①日本書紀の異称。②日本書紀以下の六国史。　日本書紀は一に日本紀ともいう。その命名の由来や、二つの名前の関係については、古来いろいろの説があって、まだ決着していない。が、日本紀という言葉に漢文体国史の総名といったようなやや観念的な意味が加わるようになった。この三河藻塩草に引用される記事は古事記・続日本紀・日本三代実録であるが主に続日本紀を引用しているので、続日本紀を意味する。

因みに六国史とは　日本書紀・続日本紀・日本後紀・続日本後紀・文徳天皇実録・日本三代実録

・続日本紀（しょくにほんぎ）平安初期の官選国史。六国史（りっこくし）の第二番目。四〇巻。光仁天皇の命によって石川名取・淡海三船らが撰集をはじめ、藤原継縄・菅野真道らに撰進事業が継承されて延暦一六年奏上された。文武元年～延暦一〇年の九五年間を編年体で記す。

八雲御抄（やくもみしょう）　鎌倉時代の最大の歌学書、順徳天皇（第八四代）の御撰。全六巻、承久三年（一二二一）までになったと思われる原稿本は伝存不明。草稿本を増補し、藤原定家に与えられたものが広く伝存。先行の歌学研究の集大成。歌学的知識、詠歌作法、歌語の収集と解釈、名所解説、歌論の見解などを記す。後人が私記を追加したものがあり、さらに書歌の位置を変更したものが諸版本として流布。

藻塩草（もしおくさ）　室町時代の連歌用語辞書。二〇巻。宗碩著。寛永古活字本などがある。連歌を詠むための手引きとして、天象・時節等二〇項目に分類して歌語などを集めたもの。

藻塩―塩を採取するために用いる海草。かき集めて潮水をそそぐところから和歌では多く「書く」「書き集める」に掛けて用い、また歌などの詠草をもさす。

伊勢物語（いせものがたり）　平安時代の歌物語。作者不明。現存本は、ある男の初冠（ういこうぶり）から辞世の歌に至る約一二五の章段より成る。「古今集」以前に存在した業平の歌物語を中心にして次第に他の章段が付加され、「後撰集」前後に現存の形になったかという。

在五が物語・在五中将日記・勢語等とも言う。

延喜式神明帳（えんぎしきじんみょうちょう）

延喜式―平安中期の法典。五〇巻。延喜五年醍醐天皇（第六〇代）の命により藤原時平・忠平らが編集。延長五年（九二七）に完成。弘仁式・貞観式以降の式を集大成したもの。康保四年施行。

神名帳―神社とその祭神を記す帳簿。とくに延喜神名式（延喜神名帳）を指すことが多い。これは奈良時代、祈年祭に朝廷から幣帛（官幣・国幣）を受ける官社の一覧表で、祭神の総数三一三二座、神社の総数に八六一処が登録されている。

因みに、式内社（しきないしゃ）とは、式社つまり延喜式の神名帳に掲載されている神社の事。式内←→式外（しきげ）

長明道中記（ちょうめいどうちゅうき）

光行道中記（みつゆきどうちゅうき）

右の二つの道中記は現在では存在しない。三河藻塩草作者の渡邉氏が生存していた江戸中期には『海道記』（後述）を『鴨長明海道記』と題した本があったり、『東関紀行』（後述）の伝本に『長明道之記』『親行（ちかゆき）道之記』等とも題して流布していたらしい。『群書類従』には『海道記』は源光行著とし、『東関紀行』は源親行著としている。ちなみに、光行・親行は親子である。

山家集（さんかしゅう）　平安末期の私歌集。西行の詠歌を収める。四季・恋・雑に部類され、歌数は流布本で約一六〇〇首、異本で約六〇〇首ある。西行の歌の集を山家集と呼んだのは、いつからのことか、またその成立はいつ頃で、誰が編纂したものか、それらについての詳細は分かっていない。南北朝以前に西行私淑の誰かが、西行が生前に自分の歌を書き留めて置いたものや、その側近者が聞くに従って写し留めて置いたものを整備して、今日の山家集となったものと思われる。

詠歌した西行は俗名佐藤義清（のりきよ）、元永元年（一一一八）比較的裕福な武士の家に生まれた。はじめは徳大寺実能の随身となり、のち後鳥羽上皇の北面の武士として兵衛尉にまでなった。が、何を感じたのか保延六年一〇月一五日二三歳の若さで出家した。法名円位。また西行と号した。建久元年（一一九〇）二月一六日七十三歳で河内の国広川寺で死んだ。

紫式部家集（むらさきしきぶかしゅう）　こういう書物はないが、「日記歌紫式部」（図書寮蔵）あるいは「紫式部日記歌」（内閣文庫蔵）という伝来不明の歌集がある。（岩波文庫版『紫式部日記』（昭5）巻末に附載された）

この「日記歌」という本は二部から成っており、後編は「入撰集不見此冊歌」とあって「日記歌」にない勅撰集入集歌を後人が増補したもの。前編は九十一首。これがすべて紫式部日記からとられた、というが、この「日記歌」のうち最初の十二首をのぞいた後の部分が赤染衛門集の異本である。という。

平家物語（へいけものがたり）　鎌倉前期の軍記物語。「徒然草」には作者として信濃前司行長の名があるが、成立年共に未詳。十二世紀末の治承・寿永期の動乱を、平清盛を中心とする平家一門の興亡を軸としてとらえ、仏教的無常観を基調に、叙事詩的に描く。古くは「治承物語」と呼ばれ、三巻または六巻の時代があったようだが、次第に加筆増補され、多くの異本を生じた。世に行われている一方流の語り本は十二巻で、巻末に「灌頂巻」がある。語り物として琵琶法師によって語られ、広く愛好され後世の文学に大きな影響を与えた。

十六夜日記（いざよいにっき）　鎌倉中期の紀行文。一巻。阿仏尼作。夫藤原為家（藤原定家の男）の死後（建治元年一二七五没）、実子為相と先妻の子為氏との領地相続争いの訴訟の為、弘安二年（一二七九）一〇月一六日に東海道を鎌倉に下った折りの紀行に序を伏したものを前半。翌年秋までの鎌倉滞在の記を日記文学に、同五年鎌倉八幡宮に奉納した長歌を添えたもの。擬古文体を用いる。「道の記」あるいは「旅の記」で、歌枕ごとに多くはそれに寄せた述懐を詠み、歌枕を詠む実例の意味を込めて鎌倉から都の息子達に送っている。

順和名集（したごうわみょうしゅう）　正しくは『和名類聚抄（鈔ともかく）』意義分類体の辞書。源順（みなもとのしたごう）撰、正平年間（九三一―三八）成立。『順和名（したごうわみょう）』などともいう。醍醐天皇の皇女の勤子内親王のために撰進した書で、部類を分かち、項目を立て、内外の諸書から記事を引用し、三千余の項目と万葉仮名による和名約三千・ならびに撰者の説を付記する。全文漢文で記され、和訓も万葉仮名を借用する。

東　鑑（あずまかがみ）　『吾妻鏡』と同じ。鎌倉幕府の創始から中期までの事蹟を幕府自身で編纂した歴史書。治承四年（一一八〇）源頼政挙兵に始まって、文永三年（一二六六）六代将軍だった宗尊親王の帰京で終わる編年体。完成した書物か未完のままか不明だが、中間十二ヵ年分が見あたらない。全体五十二巻とされているが、嘉禄元年―安貞元年三ヵ年分が別に存在している。

各巻は、将軍ごとに纏められた将軍の実録・実紀の形を取るのを原則としている。十四世紀初頭に成立とみられる。編纂の材料として、今日残っていてそれと指摘されている書物には、京都の公家の日記として九条兼実の『玉葉』や藤原定家の『名月記』、鎌倉に下り将軍に近侍した公卿飛鳥井教定の日記、延暦寺の記録である『天代座主記』や、『平家物語』『源平盛衰記』『金塊和歌集』『六代勝事記』『海道記』などの文学作品がある。また伝来の古文書を幕府に提供したであろうと推定されている寺社に、高野山・東大寺・鶴岡・箱根・三嶋・走湯山などがある。このほか、御家人の家伝の古文書や由来書があり、幕府の政所・問注所の記録文書など、散逸した書物や文書を含めると、その材料は膨大なものであったと思われる。

一世紀に近い年月を扱かった大編纂物である本書は、鎌倉幕府の研究にはもとより、武家社会の解明に欠くことの出来ない書物である。（詳しくは国史大辞典を参照）

三河双紙（みかわそうしカ）　不明

国名風土記（こくめいふどきカ）　不明　寛文五年（一六六五）刊行の『日本国名風土記（ニホンコクメイフトキ）』のことか？著者は京都の西脇良右衛門、印記は片山文庫、上下二冊、内容は未見（インターネット調べ）

建保百首（けんぽうひゃくしゅ）　内裏名所百首とも建保三年（一二一五）十月、内裏に於いて諸国の名所を題として詠じた百首。作者は順徳院をはじめ定家・家隆など十二人がそれぞれ名所百首を詠む。

名所方角抄（めいしょほうがくしょう・などころーーー）　飯尾宗祇（いのおそうぎ）の著。名所を国別に列挙したもの。三河国については八橋・矢矧里・宮地山・二村・花園山・然菅渡・豊河・高師山があり、それを詠み込んだ和歌が付されている。
成立年代は不明。宗祇は応永二十八年（一四二一）に生まれ文亀二年（一五〇二）の没。文明十二年に山口へ下向したときの紀行「筑紫道の記」がある。明応九年（一五〇〇）八十歳で越後へ下向している。

名所小鑑（めいしょこかがみカ）　不明
『名所和歌抄出類聚』か？　また『三州名所和歌集』か？これらの総称として「小鑑」としたか？不明。
『名所和歌抄出類聚』は巻首の序に「時に、永くたゞしき年のはじめの秋、一葉の風にまかせてかきちらし侍り」とあり、永正十七年（一五二〇）七月成立と知られる。「素純法師とひそかに相談し、名所和歌抄出類聚と号し」とあるが、作者は明らかでない。
『三州名所和歌集』（刈谷図書館村上文庫文）は、名所を川・野・寺・崎などの類別に配列。成立・作者などは不明。

烏丸殿道中記（からすまるどのどうちゅうき）　こういう題名の書物はない。烏丸殿というのは江戸時代前期の公家烏丸光廣。元和二年（一六一六）権大納言に至り、同六年正二位に叙せらる。寛永十五年（一六三八）七月十三日没六十歳。人となり不羈にして逸話に富み、多才多芸にして和歌・連歌はもとより、書画・茶道などをよくする。慶長八年細川幽斎より古今伝授を受け、二條派歌人として著聞した。紀行文に『あづまの道の記』『春のあけぼのの記』がある。『春のあけぼのの記』は「光廣卿道の記」の内題で、寛永十二年二月、著者が京都より江戸に赴いた際の詩歌を主とした紀行文である（刈谷市立図書館蔵）。「烏丸殿道中記」は上記二つの紀行文の総称であろう。

＊以下は引書として掲げられていないが、本文中に多く引用されている書名について簡単に解説する。

『海道記（かいどうき）』　鎌倉時代の京都・鎌倉間の紀行。一冊。『鴨長明海道記』と題した本もあり、源光行・如願法師を著者とする説もあるけれど、いずれも年齢的に合わないので誤り。という。京都出発は貞応二年（一二二三）四月四日、以後東海道旅行の様を日次に従って記す。文章は対句の多い漢文調の表現が特色。『平家物語』『吾妻鑑』の素材ともなった。群書類従では作者を源光行とする。

『東関紀行（とうかんきこう）』　鎌倉時代の紀行文。伝本により『長明道之記』『親行（ちかゆき）道之記』などとも題するが、作者は鴨長明や源親行きとは考えられず不明。一巻。仁治三年（一二四二）成立か。五十歳をすぎた作者がこの年はじめて関東に下ることになり、馴れぬ旅路に十余日を経て鎌倉に着くまでの「目に立つ所々、こころとまるふしぶし」を書き留めたもの。短い序と東海道中の記と、鎌倉滞在の記とからなる。中心を成す道中の記では、多くの歌枕で詠歌している。流麗な和漢混淆文で紀行文の一つの型を完成した。松尾芭蕉の紀行文にも影響を与えた。群書類従では作者を源親行としている。

『万葉集（まんようしゅう、連声で「まんにょうしゅう」とも）』

現存最古の和歌集。二〇巻。勅撰説もある。巻一・二を核として巻一六までが付加され、それに巻一七以下の大伴家持の歌日記的体裁の四巻が加えられている。現存の形に近いものに最後にまとめたのは大伴家持。成立は奈良時代の末頃とされる。

所収歌の歌体は短歌が大部分で、長歌・旋頭歌・仏足石歌・連歌を含む。歌数は約四五〇〇首。他に漢詩文数編がある。作者層は天皇・皇族・貴族・官人・防人（さきもり）遊女・乞食者（ほがいびと）など広く、東国民謡といわれる東歌（あずまうた）などもある。

五世紀初頭の仁徳天皇時代から淳仁天皇の天平宝字三年までの時代の歌を収める。代表的歌人は額田王・柿本人麻呂・高市黒人・山上憶良・大伴旅人・大伴家持など。

「名寄（なよせ）」　○名寄とは一名所の名や物の名称などを寄せ集めること。

『歌枕名寄』澄月の著。勅撰集・私撰集・百首・歌合などの名所和歌を類別。成立年未詳。

『類字名所和歌』里村昌琢の著。二十一代集中の名所を詠じた歌を類別したもの。成立年代は不明。昌琢は寛永十三年（一六三六）二月没。

他にも多々あると思うが調べきれない。渡邊富秋が何を参考にしたか不明。右二つの書には「豊川」を詠じた歌が記載されていないので、或いは他の書を参考にしたか。

『富士紀行（ふじきこう）』　飛鳥井雅世著。永享四年（一四三二）九月、室町幕府六代将軍足利義教（よしのり）は富士山見物の旅に出た。それに供奉したときの紀行文。同行した者の中に常光院堯孝もいて「覧富士記」をものした。

また明応八年（一四七六）五月、飛鳥井雅康（雅世の二男）も富士見物のため東国に下り「富士歴覧記」を著した。

本文中「富士紀行」「紀行」「富士」「関東記」等で飛鳥井雅世・雅康・堯孝（常光院）等と和歌作者名があるのはおおよそ前記著書（―線）である。

『夫木（ふぼく）』 正しくは『夫木和歌抄』 鎌倉時代後期の私選累代集。三十六巻。撰者は冷泉為相の弟子、遠江の豪族勝間田（勝田）長清。延慶三年ごろ成立。撰歌対象は城代から延慶ごろまで。男女僧俗各層にわたる。総歌数は新編国歌大観によれば一万七千三百八十七首。『万葉集』の訓詁享受の面で注目すべき点があり、特殊な歌題の作品を収載すること。今日伝存しない家集・歌合・私撰集などの片鱗をとどめていること『玉葉和歌集』その他の撰歌資料となったこと、後世の類題歌集や歌枕書などに材料を提供したことなどは本書の功績であるという。

『堀川百首（ほりかわひゃくしゅ）』 正しくは『堀川院御時百首和歌』はじめての応制、組題・類聚百首。『堀川院初度百首』『堀川院太郎百首』とも称された。藤原公実以下当代を代表する十六歌人の組題百首を春・夏・秋・冬・恋・雑に部類し、その中の百題の歌題ごとに和歌を類聚し、堀河天皇に進覧した。この類聚百首の中世和歌に及ぼした影響は大きく、堀川百首題は和歌習作に広く利用された。

『身延紀行（みのぶみちのき）』 身延参詣の紀行。元政（日蓮宗僧）著。上下二巻。寛文三年（一六六三）刊。万治二年（一六五九）八月十日、名古屋から東海道を経て身延に至り、帰途は鎌倉・池上を尋ね、江戸へ赴き、十月五日関ヶ原に帰着。その往復の道中を日記体で記した。漢詩や和歌を交えた近世における代表的な紀行文。

『東国紀行（とうごくきこう）』 谷宗牧の著。一冊。天文十四年（一五四五）成立。天文十三年九月下旬、子の無為（宗養）らを伴って都を立ち、途中尾張の織田信秀に女房奉書を伝え、十二月駿河府中に着き、先師宗長の跡を弔う。紀行は未完であるが、戦国時代の地方文化を精叙している。

以下略

＊小堀宗甫＝小堀遠州

＊細川幽斎――家集（衆妙集）

参考文献

「三河文献集成」（国書刊行会）
「国史大辞典」（吉川弘文館）
「日本古典文学大系」（岩波書店）
「国語大辞典」（小学館）
「群書類従」
「阿仏尼（人物叢書）」（吉川弘文館）
「愛知県の地名」
インターネット